コミュニティソーシャルワークモデル事業

# 下市町モデル報告書

平成29年４月～平成31年３月

社会福祉法人 奈良県社会福祉協議会

# 内　容


**Ⅰ．CSWモデル事業概要（奈良県社会福祉協議会）** …… 1

**Ⅱ．下市町モデル** …… 2

1．概要 …… 2

（1）下市町の地域概要 …… 2

（2）CSWモデル事業概要 …… 3

（ア）CSW配置目的 …… 3

（イ）CSW体制 …… 4

（ウ）下市町社協の戦略 …… 5

2．CSWの活動経過 …… 6

（1）年間でみるCSWアプローチと効果 …… 6

（ア）平成 29 年度 …… 6

（イ）平成 30 年度 …… 7

（ウ）2 年間の活動内容統計 …… 8

（2）具体的な取り組み …… 9

（ア）個別支援 …… 9

（イ）地域支援 …… 10

3．事例 …… 28

（1）個々の支援 …… 28

（2）つながりの場づくり―新規立ちあげサロン …… 37

（3）見守りの活動づくり―支え合いマップを通した見守り …… 43

**Ⅲ．「夢語り」から始める地域づくり（奈良県社会福祉協議会）** …… 45

1．下市町モデルの 2 年間をふり返って（成果と導入に向けた要点） …… 45

2．県内におけるCSW普及に向けて …… 46

# Ⅰ．ＣＳＷモデル事業概要（奈良県社会福祉協議会）

奈良県社会福祉協議会では、地域共生社会の実現に向けた現場実践を支える鍵として、コミュニティソーシャルワークの県内普及を目指し、平成28年度から平成29年度まで香芝市社会福祉協議会とともに「市部モデル」に着手（『コミュニティソーシャルワークモデル事業　香芝市モデル報告書』参照）。続いて、平成29年度から平成30年度まで下市町社会福祉協議会（以下、下市町社協）とともにコミュニティソーシャルワークモデル事業を展開した。「中山間モデル」を構築することが目的である。

中山間地域は、既存の社会資源が少なく、多くの地域課題を抱えている。一方で、近年弱体化したとはいえ、地縁のつながりは根強い。これを強みと捉え、地域づくりに活かす方向で進めてきた。目指したのは、**「既存の社会資源を活かした地域づくり」**だ。

県社協は、スーパーバイザーを派遣。先行する市部モデルを基盤に、進め方の助言、振り返り、共通する地域課題に応用できる事例紹介等を行いながら、下市町社協とともに地域づくりを推進してきた。

本書では、ＣＳＷとして何ができるか、今一度社協職員として立ち返り、試行錯誤を繰り返しながら、進めてきた下市町社協の２年間の実践をまとめた。次章以降で、この２年間の取り組みと成果について、統計数値、事例等を用いて記録する。県内社協職員の皆様の実践に役立てていただければ幸いである。

※コミュニティソーシャルワーカー（CSW）・・・対象を限定せずに、困り事を抱えるＡさんの〔個別支援〕を起点に共助の基盤となる〔地域の仕組みづくり〕や、解決の為の新たな〔資源開発〕までを一貫して対応する〔エリア担当〕職員。

# Ⅱ．下市町モデル

## 1 概要

### （1）下市町の地域概要

| 【基本事項】H30.10.31 現在 | |
|---|---|
| 面積 | ６１．９９㎢ |
| 人口 | ５，４９５人 |
| 世帯数 | ２，４７０世帯 |
| 年少人口（15歳未満） | ３５３人 |
| 生産年齢人口（15～64歳） | ２，６８４人 |
| 老年人口（65歳以上） | ２，４５８人 |
| 高齢化率 | ４４．７３％ |
| **【要介護認定者数】** | |
| 要支援 | １４１人 |
| 要介護 | ４００人 |

| 【自治会数】 | ４１箇所 |
|---|---|

| 【民生委員・児童委員数】 | ４１名 |
|---|---|

| 【小地域福祉活動の推進】 | 自治会域　H30.10.1 現在 |
|---|---|
| ふれあいいきいきサロン | ３０／４１ |
| 見守り活動 | ２／４１ |
| その他 | 住民懇談会、防災・減災関係、交流活動 |

| 【社会資源】 | |
|---|---|
| 福祉施設・機関（高齢者） | 特養１箇所、老健１箇所、デイ２箇所 |
| 福祉施設・機関（障害者） | ２箇所 |
| 福祉施設・機関（子ども） | 保育所１箇所、子育て支援センター１箇所 |
| 教育施設・機関 | 幼稚園１園、小学校１校、中学校１校 |
| ボランティア | グループ数１０グループ、所属人数１９４人<br>個人ボランティア数４３人 |

## （2）CSWモデル事業概要

### （ア）CSW配置目的

**◆ 総合相談支援体制の強化と地域づくりの啓発**

地域には、様々な問題を抱えた人がおり、その問題は多様かつ複合的である。それらを支援していくためには、地域課題や住民一人ひとりの困りごとを分野を問わず受けとめ、寄り添いながら一緒に対応を考える「寄り添う支援」が必要である（総合相談支援機能）。

一方で、困りごとをいち早く“発見”するための地域住民の“気づき”も大切だ。住民は、日常的に生活や活動の中でいろんな“気づき”を得ている。その“気づき”から“見守り”や“支え合い”の活動が生まれることもある。しかし、残念ながらそうした“気づき”は埋もれてしまうことも多い。せっかく住民が発見した“気づき”をしっかりと住民同士で共有したり、専門職と共有したりするなど“つなぐ”ことが必要である。“気づき”を得たり、“つなぐ”には、基盤となる地域力を高め、「支え合う地域づくり」をしていくことが必要である。

下市町社協では、この「寄り添う支援」と「支え合う地域づくり」を同時に推進する役割を担うCSWを配置することにより、総合相談機能の強化や地域づくりの啓発を図ることを目的とした。

## CSWとして活動してよかった３つのこと

CSWとして改めて戦略を持って活動することで、

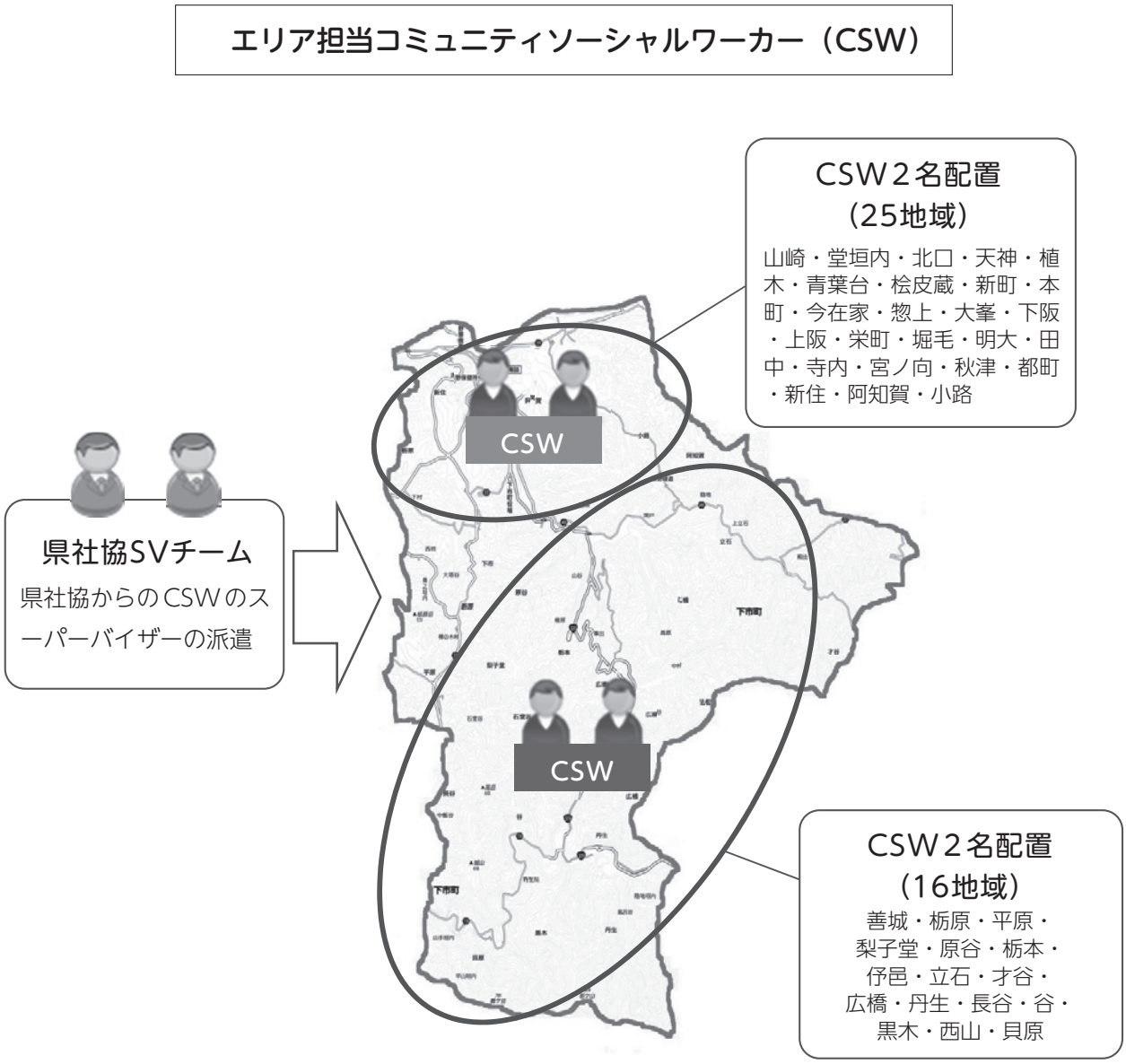
- 今まで社協がしていた事業・活動に意味が生まれた。
- 地域や行政に具体的に社協の活動が伝わり易くなった。
- 住民の社協への認知度が上がった。

## （イ）CSW体制

平成29年度～既存の社協職員４名をコミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）として配置（兼務）。町内41地区（７ブロックの福祉圏域）を２つに分け、エリア担当としてベテランと若手の２人１組で配置。地域アプローチ対象を自治会域（小地域福祉活動の範囲）と捉えて活動した。

モデル期間中は、県社協からスーパーバイザーチームとして職員を派遣。CSWに同行し、地域に出向いたり、CSWと随時振り返りや検討を行ったりする等の連携を行った。

※小地域福祉活動・・・住民になじみのある日常生活圏域で行われる住民主体の福祉活動。



## （ウ）下市町社協の戦略

### a．関連事業と一体的に

社協が以下２つの事業を町から受託したことで、CSW 活動と一体的に取り組む体制をとることができ、地域アプローチをする基盤が社協内にできた。

**◆ 国庫補助事業「地域力強化推進事業（委託事業）」との連動**

下市町が実施主体となるモデル事業を受託し、CSW事業を展開。CSW活動と併行して町民向けの「しもいち支え合いセミナー」を年２回（２年間で計４回）実施し、新たな地域福祉活動の創生へ向けた働きかけを行った。

**◆ 生活支援コーディネーター業務との連動**

介護保険制度に基づき、“地域づくり”をコーディネートする「生活支援コーディネーター」を平成28年から受託。社協職員１名が担っている。これにより、町内全域での高齢者の出番づくりや支え合いづくりの取り組みをCSW活動とも連動して実施。

町主催で実施された「生活支援サポーター養成講座」では、講座の1つを社協が担当。CSW活動の中で見えてきた「住民の声」「制度の狭間にある困りごと」の現状を伝え、参加者相互に「私ができること」を考えてもらうなど“支え合い”につながるきっかけづくりを行った。

また、これまでの事業とも連動させ、社協全体で意識を持ってＣＳＷ活動を展開させた。

**◆ 介護保険事業との連動**

下市町社協では介護保険事業も行っているため、高齢者ケースの把握がしやすいという特徴がある。日頃から把握している制度の狭間にある利用者のニーズを反映する視点を持ってＣＳＷ活動に取り組むことができた。

### b．地域アプローチの振り返りと準備

**◆ ワーカー行動記録の導入**

CSWの業務は多岐にわたり、その全体像をつかむことは非常に難しい。組織内での進捗状況の共有、実践の振り返りのため、CSW行動記録様式（Excel データ様式）を導入し、事業当初より記入を開始。各CSWが共通の様式を用いて業務（活動）を行う度に随時記録を行った。

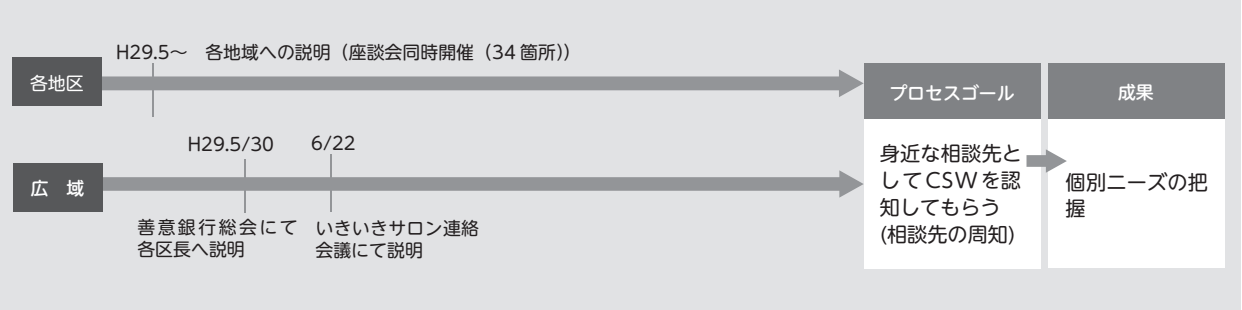
**◆ CSW連絡会議**

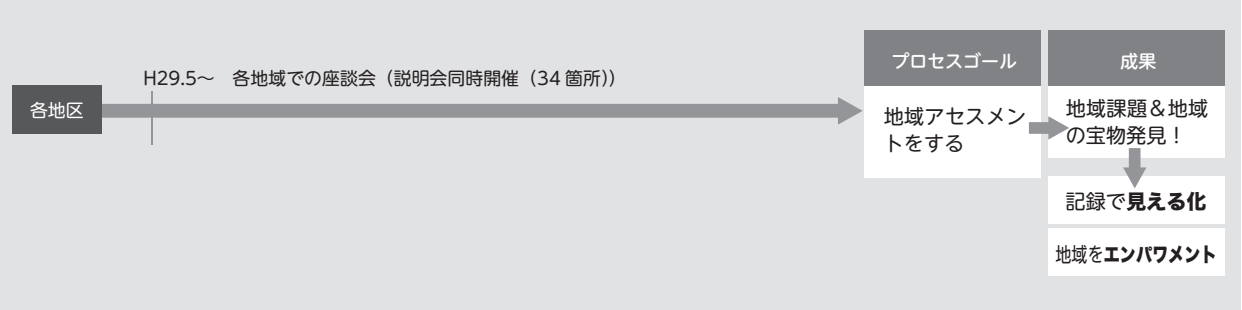
下市町社協CSWと県社協ＳＶチームで進捗状況の確認、CSWの実践の振り返りや今後の方針・展開の検討を行った。CSW連絡会議の中で、実践の悩みを共有し、次のアプローチへの検討を行い、実践するというPDCAサイクルを繰り返した。

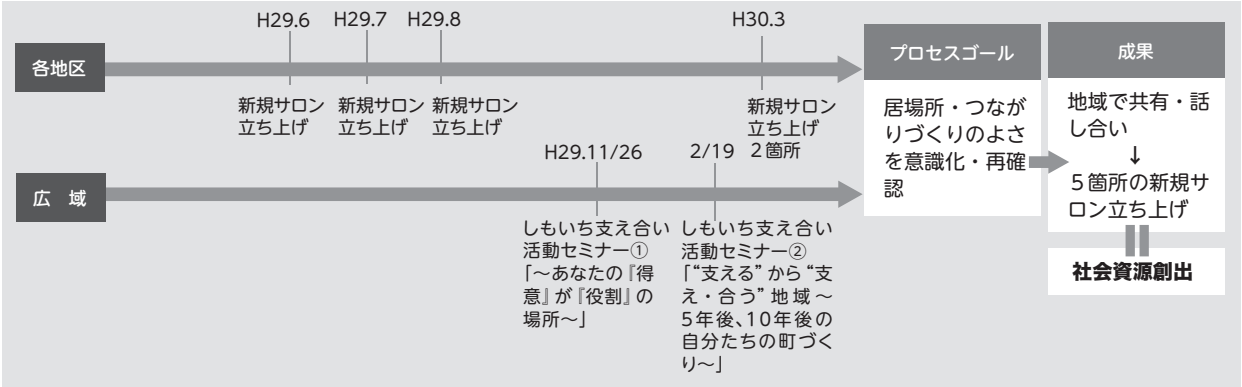
# 2 CSWの活動経過

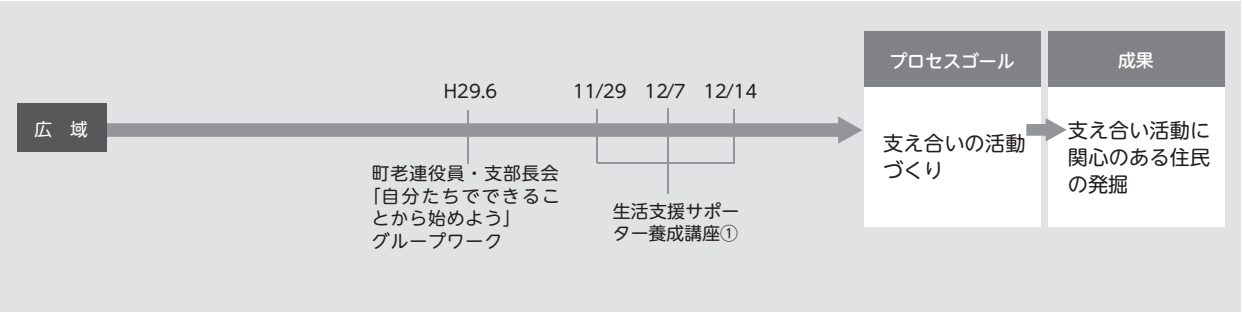
## （1）年間でみるCSWアプローチと効果

### （ア）平成29年度



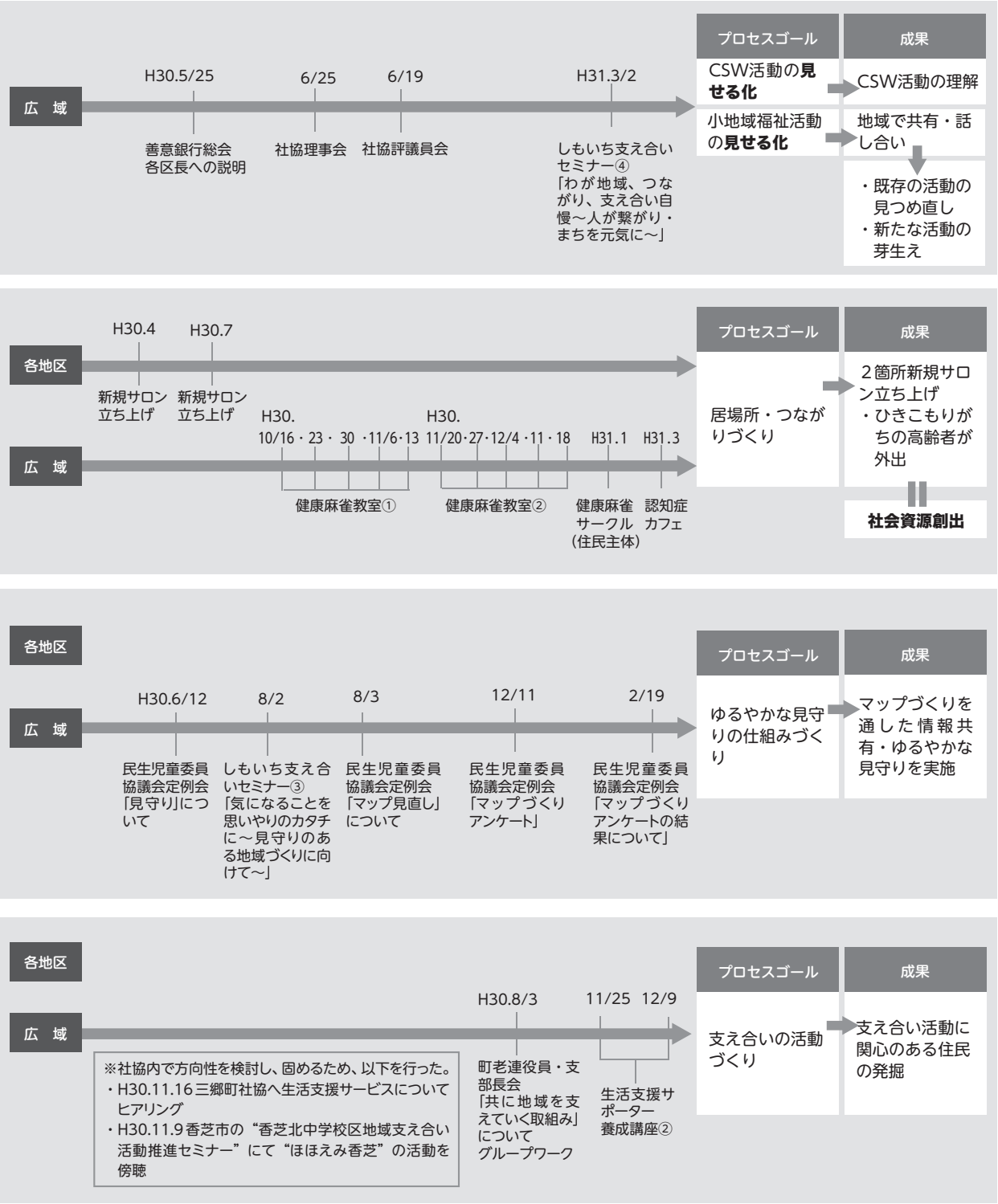




※上記の他にも、各地区への地域支援・個別支援を随時行った。

## （イ）平成30年度

**タスクゴール（社協の目指す地域像）**

住み慣れた地域で誰もがその人らしく安心して暮らせるように、住民が互いに認め合い“支え合う”地域をともに目指す。




※上記の他にも、各地区への地域支援・個別支援を随時行った。

## （ウ）２年間の活動内容統計

【活動内容の分類別回数の実績】

| | 地域支援 | | | | | 個別支援 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度 | 広域支援 | 関係形成 | 組織化・立ち上げ | 継続支援 | 連絡調整 | 直接相談・支援 | 間接支援 | 地域からの発見・繋ぎ | 他機関への繋ぎ・連携 | 地域との連携・協働支援 | ケア・調整会 | その他 |
| H29 | 5 | 119 | 11 | 52 | 67 | 112 | 17 | 48 | 78 | 31 | 4 | 121 |
| H30 | 3 | 28 | 10 | 86 | 37 | 130 | 28 | 58 | 78 | 40 | 4 | 108 |

【CSW 活動内容の分類】

| | | |
|---|---|---|
| 広域支援 | | ネットワーク構築、社会資源開発等、町内全域に関わる内容 |
| 地域支援 | 関係形成 | 地域住民、団体・グループとの関係づくりのためのアプローチ |
| | 組織化・立ち上げ | サロン等の地域団体・グループ立ち上げの支援 |
| | 継続支援 | 地域団体・グループが立ち上がった後での運営支援等 |
| | 連絡調整 | 関係者との調整、書類渡し、会議調整 |
| 個別支援 | 直接相談・支援 | ワーカーが直接当事者に関わり支援すること |
| | 間接支援 | ワーカーが当事者のために他の機関や団体と相談、調整すること |
| | 地域からの発見・繋ぎ | 地域住民から“気になる人”の情報がワーカーにあがってきた場合 |
| | 他機関への繋ぎ・連携 | 当事者への支援の中で、必要に応じて他機関へのつなぎや連携を行った場合 |
| | 地域との連携・協働支援 | 地域住民と連携して当事者の支援を行った場合 |
| | ケア・調整会議等 | 地域ケア会議、調整会議に出席した場合 |
| その他 | | 上記に当てはまらない内容 |

## （２）具体的な取り組み

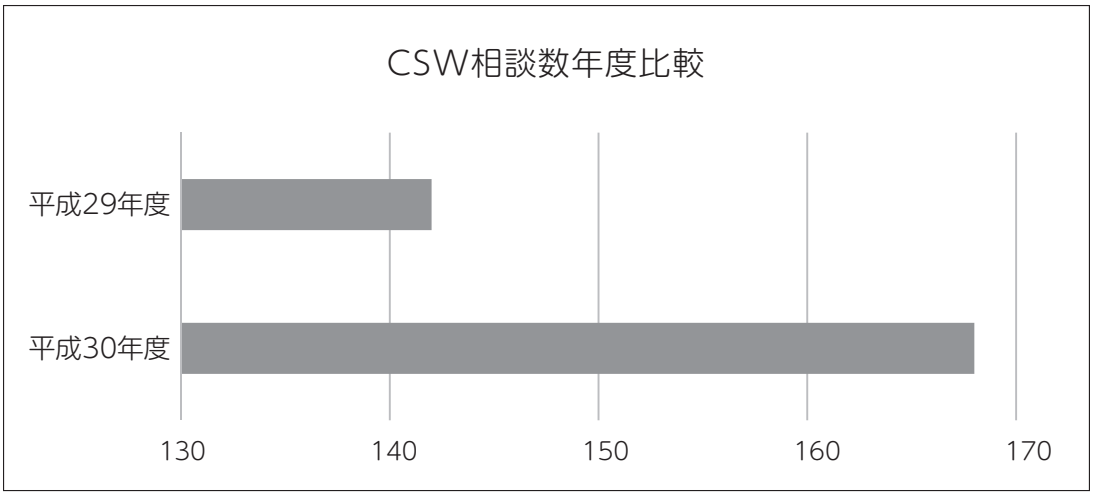
### （ア）個別支援

**◆ 地域からあがる個別相談への対応**

CSWは、高齢者や障害など分野を問わず、困りごとや気になることを受けとめる。CSWが「福祉のなんでも相談員」と認知されるにつれ、「気になる人（心配な人）」について地域からの声があがりはじめている。どのように関わるのがよいか、チームで共有し、悩み、検討しながら進めている。CSWで抱え込まず、住民と一緒に考え、他の専門職にもつなぎながら、当事者も周囲も安心して暮らせる方法を模索した。

◇　個別相談件数：H29年度　142件（延べ件数）
　　H30年度　168件（延べ件数）

◇　主な相談内容：高齢者に関すること、認知症に関すること等




### 数値からの“気づき”

CSW配置以前に比べて相談件数は増加しました。CSWを配置し、各地域への周知を行ったことや地域に出向く回数が増加したことが相談件数の増加につながったと考えられます。

## （イ）地域支援

### a．準備

## CSWの戦略！ 相談先の“見える化”

説明資料やチラシにCSWの顔写真や名前、相談先の電話番号を記載することで相談先や地域担当を分かりやすく、明確にすることにしました。

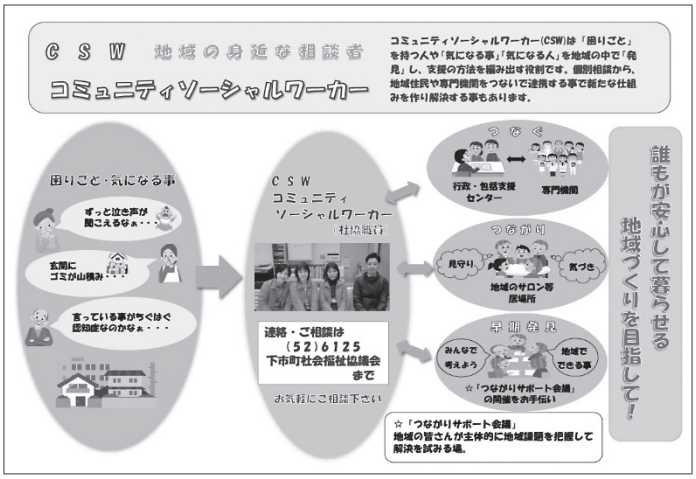
**実践** **地域への周知・説明用チラシ・資料の作成**

事業にあたり、県社協と下市町社協で検討を行い、展開がスムーズに行くよう、CSW の周知を図るところから始めることとした。

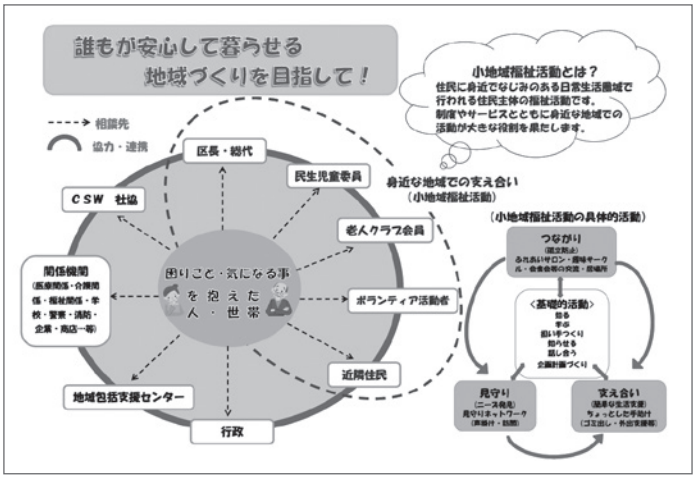
関係機関や地域住民への説明がわかりやすい内容となるよう何度も検討を重ね、資料作成を行った。また説明会に参加されていない方への周知や、相談先（連絡先）を明確に示せるようにした“CSW啓発チラシ”の作成も行った。

**▼CSW啓発チラシ**

〔表〕




〔裏〕



### b．周知・啓発、地域アセスメント

## CSWの戦略！ CSWの覚悟を示し、住民の力を信じる

● **CSW＝「福祉のなんでも相談員」という覚悟**

地域では、「CSW」という言葉や存在が認知されていないことから、分りやすく伝える為に「一言でいえば『福祉のなんでも相談員』です」と周知を図り、小地域福祉活動の重要性を訴えました。

● **“地域住民の気づき”に着目**

「困っている方を相談につなげるためには地域の方々の“気づき”が必要である」との説明を行いました。

**実践１　CSWの周知及び小地域福祉活動についての説明（町域）**

まず、ＣＳＷについて知ってもらうために５月に各区長への説明を行った。次いで、６月にいきいきサロン連絡会議にて説明を行った。説明時、質問や意見は出なかったが、会議終了後に個別に話をする中で、「地域へ説明に来て欲しい」というニーズをキャッチすることができた。

**実践２　CSWの周知及び小地域福祉活動についての説明（各自治会域）と座談会の開催**

町域への説明と並行して、各地域に出向いて周知を図るところからアプローチを開始。小地域（各自治会域）単位で説明会及び座談会を開催。町内34か所で開催し、のべ426名が参加。「CSW配置の周知」、「小地域福祉活動の必要性」を伝えると同時に、住民とともに地域について話し合った。始めのころの座談会では、地域住民と一緒に地域を改めて見つめ直そうと、「地域で困っていること」「地域課題」を中心に聴いたが、あまり意見が出なかった。そこで、CSW連絡会議でその悩みを共有、検討し、以下の様に場の運営を見直した。

**手法①**　「地域の課題」を聴くのではなく、「地域の良いところ（ストレングス）」を聴いたうえで、「もっと住みよい地域にするためにはどうしたらよいか」というプラス思考で話を展開。

**手法②**　意見の出やすい環境にするため、ホワイトボードを活用※して見える化し、参加者から出た意見をもとに話の展開が進みやすい様に配慮。

**手法③**　会議後に、板書を基に整理した記録を地域にフィードバックすることで、その場だけの話にせずに次につなげる。

※ホワイトボードの活用については、実際にCSW連絡会議の中で実践し、参加者目線で以下の様な有効性を実感してから、現場で実施した。
①ホワイトボードに自分の意見を書いてもらうことで、受けとめられた感がある。
②まだ出ていない意見が明確で、出ていない意見を言おうと考える。

この結果、次のような効果があった。

**①話し合いが活発化**

- 「地域自慢」がよくあがるようになり、自然発生的な地域の社会資源を発見、共有することができた。
- 課題という観点からではなく、より住み良い地域にするために何が必要かという視点で考えることで、意見が出やすくなった。
- 地域によっては、課題抽出、今後の方針まで話し合うことができた地域もあった。
- ホワイトボードに参加者の意見を可視化することで、その場への住民の参加を促すことにつながった。
- 地域住民と一緒に地域をアセスメントすることができた。

**②継続した話し合いに発展**

- 座談会後に話し合った内容を整理して「地域アセスメントシート」として記録に残し、住民にフィードバックすることで、その場限りでない継続した話し合いにつながった。

| 平成29年度中説明・座談会開催カ所（34カ所） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 開催日 | 地域 | 参加人数 | 開催日 | 地域 | 参加人数 |
| 平成29年 | | | 平成29年 | | |
| 6月20日(火) | 阿知賀 | 18名 | 9月22日(金) | 大峯 | 7名 |
| 8月19日(土) | 堀毛 | 8名 | 9月23日(土) | 梨子堂 | 21名 |
| 8月22日(火) | 黒木 | 12名 | 9月24日(日) | 長谷 | 23名 |
| | 貝原 | | 9月27日(水) | 栃原 | 16名 |
| 9月　1日(金) | 本町 | | 9月28日(木) | 北口 | 10名 |
| 9月　2日(土) | 今在家 | 17名 | 10月　2日(月) | 桧皮蔵 | 9名 |
| | 秋津 | | 10月　5日(木) | 惣上 | 名 |
| | 宮ノ向 | | 10月　7日(土) | 善城 | 9名 |
| 9月　3日(日) | 明大 | 7名 | 10月15日(日) | 谷 | 13名 |
| 9月　9日(土) | 新住 | 13名 | 11月　5日(日) | 栄町 | 25名 |
| 9月　9日(土) | 平原 | 20名 | 11月　5日(日) | 立石 | 15名 |
| 9月11日(月) | 広橋 | 31名 | 12月10日(日) | 青葉台 | 16名 |
| 9月16日(土) | 丹生 | 12名 | 12月16日(土) | 原谷 | 27名 |
| 9月17日(日) | 伊邑 | 30名 | 12月16日(日) | 小路 | 16名 |
| 9月18日(月) | 寺内 | 21名 | 12月18日(月) | 山崎 | 7名 |
| 9月19日(火) | 新町 | 11名 | 平成30年 | | |
| | | | 1月21日(日) | 才谷 | 12名 |
| | | | 3月11日(日) | 栃本 | 7名 |
| | | | | 上阪 | 15名 |

主な参加者：区長、総代、区役員、民生児童委員、地区住民など

**【座談会で出た地域課題】**

## つながりの希薄化

- 井戸端会議が減った…
- サロンに男性参加が少ない…
- 夏祭り、子供会、婦人会がなくなって、昔に比べてつながる機会が減っている…
- 婦人会や老人会など集まる機会がある一方で、加入していない方はその集まりに来られない…

## 移　動

- タクシー券が足りない…
- 町の行事などで送迎がないので困っている…
- 今は運転できているが、今後運転できなくなった時の不安…
- タクシー券で隣町の総合病院まで直接（補助の範囲内）行けず、不便を感じる…

## 高齢化

- 若い世代が離れていき、少子高齢化が進んでいる…
- 一人暮らしが増えている…

## 空き家

- 空き家が増加しており、草刈りをしたいが勝手には出来ない…

## 若者の参加不足

- 多世代交流が減っており、若い世代を巻き込むことが難しい…
- サロン活動の後継者がいない…
- 祭事や清掃活動など引き継いで行っているが、高齢化で継続していけるか不安がある…
- サロン活動において高齢化しており、もっと若い世代（60代）に積極的に参加してほしい…

## 支え合い

- お節介な人が減った…
- 今後自分たちを支えてくれる世代が居ないので不安がある…
- 家族が「ほっといて」と言う場合は、どうすれば良いのか…
- 親しいからといってどこまで踏み込んでよいものか…
- 車に乗せてあげたくても、事故を起こした時の責任を考えると出来ない…

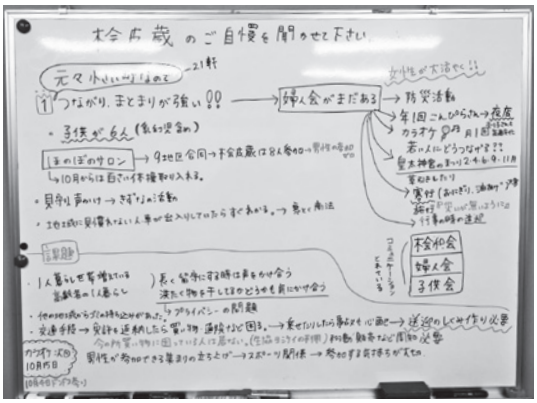
◀住民説明会・座談会の様子

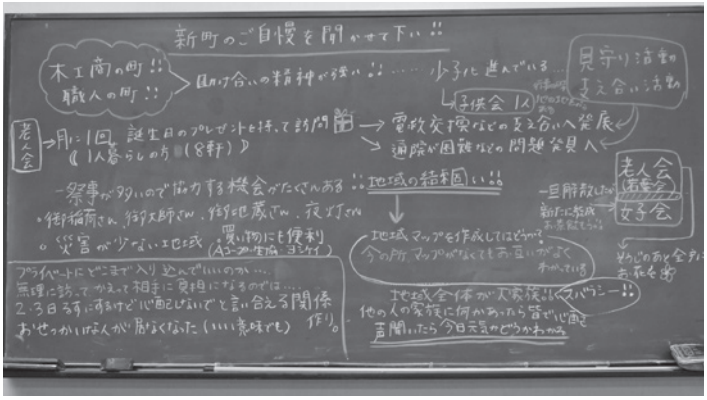
## 座談会でわかった下市町の現状

地域の行事や祭事など地域における活動がたくさん残っているところが多く、地縁のつながりが根強いことがわかりました。一方で、少子高齢化により地域活動の停滞や自治会活動の困難さ、若者の参加不足といった地域活動における課題が生じています。人間関係（つながり）の希薄化が進み、相互に支え合う機能も昔に比べて失われてきたと感じている地域も多いです。また、鉄道がないことや地形の関係上バス停までの距離が遠いことから、交通手段を自家用車に大きく依存してきたことに加え、少子高齢化が進み、交通弱者が増加してきている現状もあります。

## CSWの気づきと方向性！
## 「居場所・つながり」→「見守り」→「支え合い」

日頃から、少子高齢化により地域活動における課題が生じていることは感じていました。しかし、あると思っていた住民同士の“つながり”や“見守り”も、住民同士の関係の希薄化により失われてきていることが座談会でわかったのです。
改めて住民同士の“つながり”をつくっていく必要性を感じ、個別支援とともに地域支援にも力を入れていくことを社協内で再確認しました。実践として、まず、“早期発見の基盤づくり”となる「居場所・つながり」に重点を置いたアプローチを行い、そこから「見守り」や「支え合い」といった小地域福祉活動の展開を目指すことにしました。




▲ホワイトボード・黒板を活用して意見を可視化

### c．居場所・つながりづくり

## CSWの戦略！ 町民向けセミナーで「居場所・つながりづくり」の大切さを伝える

地域アセスメントを通して、「居場所・つながりづくり」のために以下の３点を実現させたいと思いました。

① サロン活動について、高齢者以外の住民に理解してもらえていない状態であるため、「居場所づくりは地域全体の課題」であることを知ってもらいたい。

② 既存のサロン活動者に再度活動の目的や意義を確認してもらう機会としたい。

③ 新たな居場所の創設のきっかけづくり（町内には、既に多くのサロンなどの居場所があるが、まだ十分ではない）としたい。

そこで、「しもいち支え合い活動セミナー～人がつながり・まちを元気に～自分たちの居場所づくり」と題して、平成29年度中に町民向けに２回のセミナーを実施することとしました。

**実践１**　**「つながり」「居場所」の必要性・意義を伝える― 第１回　町民向けセミナー**

日　時：平成29年11月16日（木）　13：30～15：30

参加者：約90名

（区長、総代、民生児童委員、老人クラブ、ボランティア・サロン関係者）

テーマ：「～あなたの『得意』が『役割』の場所～」

講　師：あそびの工房もくもく屋　田川　雅規（たがわ　まさのり）氏

内　容：住民が集う“居場所”や住民同士の“つながり（孤立防止）”、サロンの意義や重要性など。プログラム型のサロンが主流である下市町で高齢化による担い手問題が上がっている中、担い手の負担を減らし、楽しく継続することを提案。当日は、住民活動者（下市元気印朝市）の協力で、カフェコーナーを開き、参加者に集う場を疑似体験してもらった。

**実践２**　**“つながりづくり”から“見守り”・“支え合い”へ― 第２回　町民向けセミナー**

日　時：平成30年２月19日（月）　13：30～15：30

参加者：約100名

（区長、総代、民生児童委員、老人クラブ役員、ボランティア・サロン関係者）

テーマ：「“支える”から“支え・合う”地域～５年後、10年後の自分たちの町づくり～」

講　師：ご近所クリエーター　酒井　保　氏

内　容：“つながり”を意識した活動がサロンであり、つながることで“気になる”が生まれるという「つながり」「見守り」の小地域福祉活動の視点。一方的な「支え」ではなく、それぞれが役割をもってお互い様の「支え合い」の形をつくっていくことが大切であるなど。

## CSWの気づきと方向性！ 住民の変化を見逃さない

● **セミナーの効果**

２回の町民セミナーを経て、次のような効果がありました。

- サロン活動者は自分たちの活動が“孤立防止”や“地域の支え合い”につながっていくと改めて確認することができた。また、「サロンに来られない人がいる」という気づきを得ることも一つの“見守り”と知り、サロンに来られていない人へのアプローチに悩んでいた活動者の安心にもつながった。
- 今までサロンについてよく知らなかった区長や総代（地域のキーパーソン）がサロンの意義を知り、その価値に気づき、サロン活動者への理解を示すようになった。
- サロンのない地域からは、「サロンをつくりたい」という声が聞かれた。

● **住民の意識向上→機を逃さずアプローチ**

第２回のセミナーは、初回に比べ、やや参加者が増加していました。主要活動者以外の一般参加者もおり、CSWの地域アプローチにより、住民の意識が高まったという成果の現れが感じられました。

この機会を逃さず、個々の地域に「居場所・つながりづくり」の大切さをアプローチし、ニーズに沿った支援を行うことが必要だと感じました。

## CSWの戦略！“気づき”を得た住民や地域を支える

町民向けセミナーを受けた住民の意識に変化が見られ、アプローチする機会を逃さないように気を付けようと思いました。
既存の活動の継続を支援しつつ、新たな活動の立ち上げもできるだけニーズをキャッチし、支援するよう努めることにしました。

### 実践３　各地域に対する個別の支援

町域を対象とした町民向けセミナー等と並行して、各地域への支援も随時行った。

**➢ 地域支援に関する件数**

地域との関係形成、サロン活動に関する相談支援、立ち上げに関すること、小地域福祉活動に関することなど。
平成29年度：249件（延べ件数）
平成30年度：161件（延べ件数）

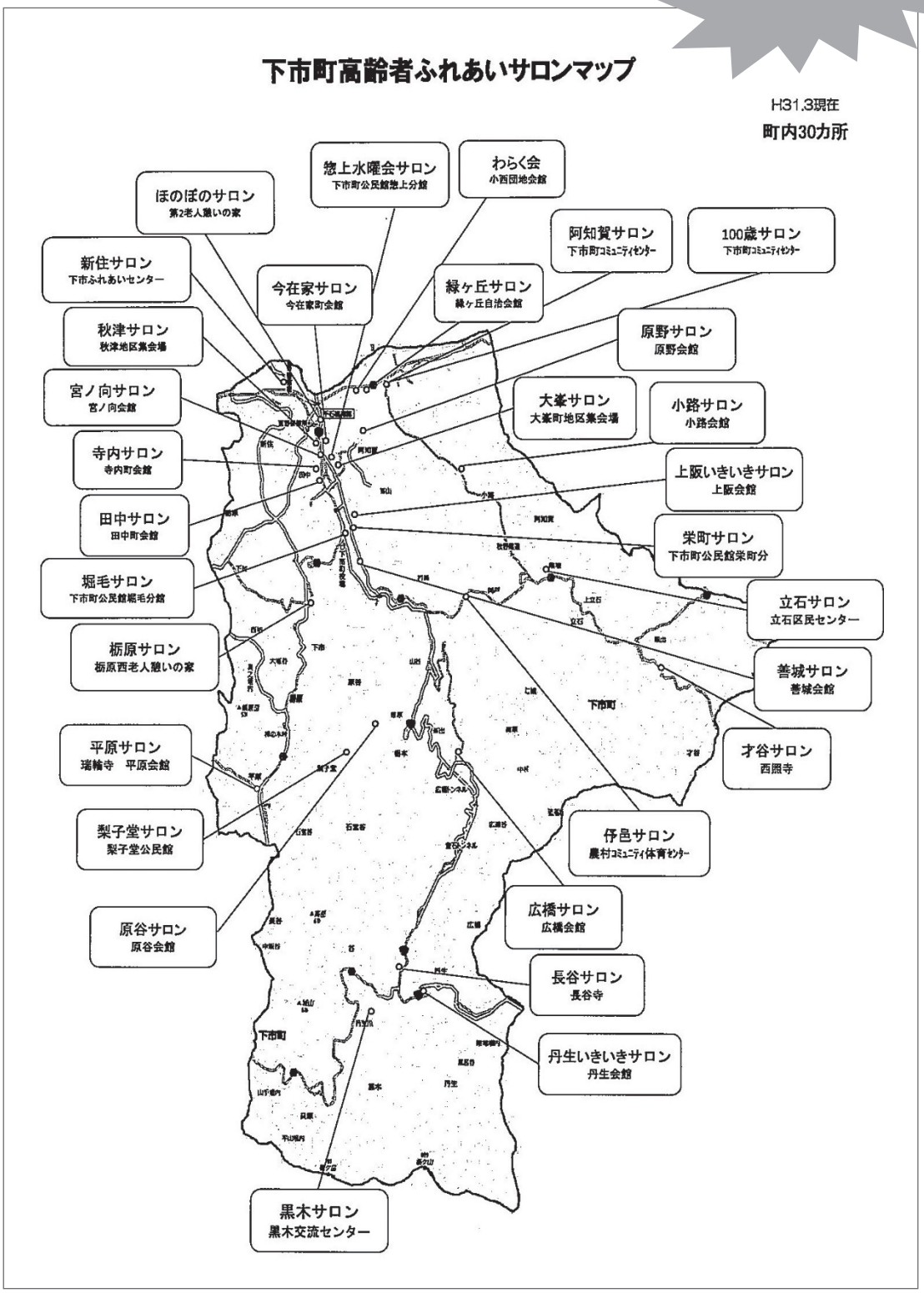
**➢ 既存サロンへの継続支援**

CSWが参加者として各サロンに出向き、信頼関係構築、困りごとや気になることの把握、地域の情報収集に努めた。
平成29年度：23箇所の既存サロン
平成30年度：28箇所の既存サロン

**➢ 地域での新たな居場所の創設を支援**

地域住民向けセミナー、住民座談会の開催等で、居場所・住民同士の「つながり」から「気になる」へと自然な見守りへ発展していく基盤（小地域福祉活動）の必要性を伝えた。好感触であった（サロンの無い）地域には時期を逃さない様にアプローチし、立ち上げへの支援を行った。
平成29年度：５箇所のサロン新設
平成30年度：２箇所のサロン新設
現在：計30箇所の既存のサロンがある

95%達成！




※39地区／41地区でつながりの場（居場所）づくりを達成。
複数の地区が一緒にサロンを実施している場合も、それぞれの地区につながりの場（居場所）があると計算。

## CSWの戦略！ 個々のニーズを大切に、広域で実現する

いろんな居場所がいくつもあることが理想だと思っています。誰もがどこかでつながれるように、各地域の居場所になじみにくい人も参加できる居場所を広域でつくることが必要だと考えました。そのために、個別支援や地域アプローチの中で気づいたニーズを大切に、できることから広域で実現することにしました。

### 実践４　広域の居場所づくり

**➢ より参加しやすい居場所へ―認知症カフェの出張**

軽度の認知症の方から「どこか出かける場所がないか」と相談があり、認知症カフェの紹介（会場：下市町交流センター）をしたが、その方は移動手段がなく、来られない状態にあった。このことから、行きたくても物理的な距離が理由で来られない人がいるのではないかと気づき、平成31年３月以降は会場から物理的に距離が遠い地域へも出張して認知症カフェを開催することにした。

※認知症カフェ・・・主な参加対象者は認知症当事者だが、対象は限定していない。認知症か否かに関わらず、地域住民が参加、交流出来る場でもあり、地域共生社会につながる場ともなっている。

**➢ 男性の居場所づくり―健康麻雀というツールでつながる場**

地域住民の声を聴く中で、サロンやデイサービスなどに通うのを苦手とする男性が多く、男性の通える場が少ないことがわかった。麻雀経験者が多いことを把握していたこともあり、男性の閉じこもり防止や認知症予防、参加者相互の親睦を深めることを目的として健康麻雀教室を開催することにした。

平成30年10月～健康麻雀教室（毎週火曜、全５日間）を実施。この時は、下市町在住の65歳以上の男性に対象を絞った。しかし、女性からも参加の希望があり、平成30年11月～（毎週火曜、全５日間）の第２弾健康麻雀教室では、下市町在住の60歳以上の方と対象幅を広げ、募集人数も４名増やした。参加者の中には、閉じこもりがちだった方もおり、麻雀好きで毎回楽しみに参加されている。

第２弾健康麻雀教室が終了した後は、月２回ペースで健康麻雀サークルとして継続。第一次会員は、麻雀教室の参加者とした。開催に際して、麻雀以外の余興を楽しめるよう囲碁や将棋も各１セットずつ備えた。並行して、初参加者向けに健康麻雀教室も毎年度１回開催することにした。ゆくゆく、交流センターだけでなく、地域でも開催されるようになれば、麻雀セットの貸し出しも検討するつもりだ。

d．見守りの仕組みづくり

## CSWの戦略！ 既存の活動を活かした マップを囲む『居場所型見守り』の仕組みづくり

● **平成30年度は、「見守り活動へ発展する仕組みづくり」**

平成29年度末、実践の振り返りの中で、「居場所・つながりづくり」が町内に浸透していることが確認できました。そこで、平成30年度は「見守り活動へ発展する仕組みづくり」に取り組むことにしました。

● **既存の活動を活かした「居場所型の見守り」を目指す**

その方法を模索した結果、サロンを始め居場所の活動が多くある下市町には、見守りネットワークを新たに立ち上げる方法よりも、今ある居場所型の活動を活かした見守りの方が定着しやすいという結論に至りました。実際にサロンに出向いた際に地域住民から“気になる人”の話を聞くこともありました。

● **“マップ”をツールとした情報共有→「見守りの仕組み」をつくる**

「居場所型の活動」から、「居場所型の見守り」を生むためには、何が必要か。話し合った結果、“マップ”をツールとして、活動者が情報を共有し合い、見守りを行う方法はどうかという結論に至りました。

● **「民生児童委員だけの見守り」から「地域全体での見守り」へ**

丁度、平成30年度は、民生児童委員協議会で取り組んでいる”支え合いマップ”の改訂の時期でした。これを機に、地域住民が“支え合いマップ”を囲んで集まり、情報共有を行い、地域課題を発見する仕組みづくりを提案して協働基盤の構築を図ることとしました。

以前より、民生児童委員協議会の事務局として、一人では見守り活動に限界があること、個人情報を扱うため孤立しやすく負担が重いことが課題だと感じていました。地域住民と情報共有することで、見守り活動の範囲を広めて民生児童委員の負担軽減につながると考えました。

### 実践1　民生児童委員と「見守り」の必要性を共有

平成30年6月12日、民生児童委員協議会定例会にて「地域でのゆるやかな見守り」の必要性を説明。地域住民とともに「ゆるやかな見守り」を行うことで得られるメリットとして、個々の負担軽減につながることを強調。その方法の一つとして”支え合いマップ”をツールとした見守りを提案した。

日頃から、個人情報を扱う民生児童委員にとって、「守秘義務」を気にする方もいる。その点については、「住民が知り得ている情報を共有するのであり、民生児童委員から個人情報を提供する必要はない」ことを説明した。

## 実践２　住民の「見守り・支え合い」についての認識を知る－セミナー事前アンケート

こうした流れの中、広く町内の住民に「見守り」について考えてもらうきっかけになるよう第３回の町民向けセミナーのテーマを**「ゆるやかな見守り」**にすることにした。
セミナーに先駆けて案内送付時、返信用はがきに「“見守り・支え合い”について」の自由記載欄を設け、住民の認識を知るツールとした。

### 【“見守り・支え合い”についてのアンケート結果】

送付対象：区長・総代、民生児童委員、下市町老人クラブ連合会役員・支部長、下市町老人クラブ連合会女性部、下市町身体障害者福祉協会役員、下市町遺族会役員、下市町社会福祉協議会理事・評議員、高齢者ふれあいいきいきサロン代表者、あきつボランティアグループ代表者、下市町白菊会役員

**➢ 気づき・思い**

- ご近所の方たちと互いに挨拶することも、おしゃべりすることも、つながり・見守りになっていると思う。
- 区長として一人住まいの方の情報が分かりにくく、民生児童委員等と情報共有する方法（法的なことも含め）がないかと日々思っている。それぞれが知らないことがあるように思う。
- 老人クラブの中で、会員の誕生日月に毎回役員でプレゼントを持参し、会員の健康状態や困ったことなどを聞き出し、すぐ対処できること（電球交換・木の剪定など）を手伝っている。
- 交通の便が悪く、通院や買い物、町の行事などへの参加の際は、皆でタクシーを乗り合わせてタクシー券を使う。
- 地域の行事やサロン等の時は声かけしている。
- ごく少人数の集落で、日常的に支え合って暮らさないと生きていけず、自然に支え合っている。村民だけでは出来ないこともあるので、行政等の支援も欠かせない。

**➢ 疑問**

- 町内自体、人口減少であり、高齢化している中、どの様に見守り活動できるのか。
- 民生児童委員との情報共有について、個人情報やプライバシーについて法的な縛りがあるのか。どこまでの範囲なら共有していいか。

これらの回答から、日頃から住民同士が自然に支え合っていることが分かった。一方で、支え合いや見守りについての問題意識はあるが、方法が分からないという悩みがあることもわかった。セミナー内容は、これを参考に住民の疑問が解消される内容になるよう企画した。

**実践３**　**「ゆるやかな見守り」の必要性を町民全体で共有― 第３回　町民向けセミナー**

日　時：平成30年８月２日（木）
（午前の部）10：00～12：00
（午後の部）13：30～15：30　　※入れ替え制

参加者：約100名
（区長、総代、民生児童委員、老人クラブ役員、ボランティア・サロン関係者）

テーマ：「気になることを思いやりのカタチに～見守りのある地域づくりに向けて～」

講　師：奈良県社会福祉協議会　地域福祉課　主幹　岡本　晴子

内　容：地域別に午前・午後に分かれて開催。一方的な見守りではなく、お互い様の「ゆるやかな見守り」となるようなヒントとして、実際の活動事例も交えて講義。「気になる人、放っておけない人、心配している人はどんな人か」を地域別グループで共有。「気になっている人や心配な人のために取り組めそうなこと」について考えるグループワークも行った。また、見守りの一つのツールとして、“支え合いＭＡＰ”づくりを提案した。

結　果：セミナーの中で、「民生児童委員の持っている情報を引き出す必要はなく、住民同士でお互いに知っていることを話し合えばよい。」と話したことで、地域でマップづくりに取り組もうという地域が出てきた。地域別のグループにしたことで、地域での話し合いもイメージしやすかったようだ。

**実践４**　**各地区で”支え合いマップ”づくりを開始（平成30年８月～）**

地域での支え合いマップづくりを開始するにあたり、地域の実情にあった形で進めてもらおうと“手あげ方式”での実施を進めた。また、実施する際はメンバーや作成方法等、個々の地域に合った方法で進めてもらった。そのため、地域によりその特徴は異なっている。

本書では、地域でマップづくりに取り組んだ事例**（Ⅱ－３．事例（3）見守りの活動づくりー“支え合いマップ”を通した見守り）**を記載しているので、併せて参照いただければと思う。

**実践５**　**“支え合いマップ”づくりの実施状況の確認**

地域での“支え合いマップ”づくりの実施状況を把握するため、民生児童委員協議会で「支え合いマップに関する」アンケートを実施した。**（アンケート結果は、P24-25参照）**

**実践６** **マップづくり実施状況を共有**

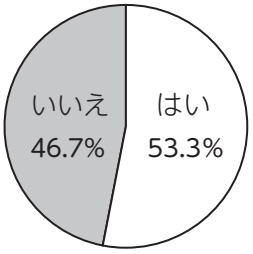
平成31年２月、民生児童委員協議会にて、アンケート結果を伝えたところ、「(地域での“支え合いマップ”づくりに）取り組んだ地区の事例を２～３事例見せてくれたら、まだ取り組んでいないところも取り組みやすい」という意見が出た。

## 今後の方向性！ 先行事例を“見せる化”する

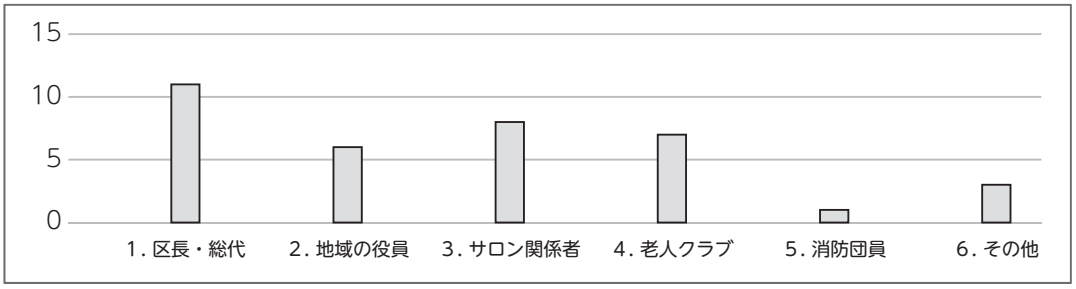
“支え合いマップ”づくりを実施している地域の状況をしっかりと把握しておく必要性を感じていました。また今回、地域でのマップづくりに取り組んでいないところにも、「やってみよう」と思ってもらえるよう、実施事例を知ってもらいたいと思っていました。
この私たちの思いが、民生児童委員協議会で出た「先行事例を見せてくれたら、取り組みやすい」という意見と合致しました。
第４回目の町民向けセミナーでは、町内のお宝自慢をしてもらおうと考えていたので、マップづくりの先行事例も盛り込み、“見せる化”しようと計画しました。

## 【支え合いマップに関するアンケート】

支え合いマップの見直しで、地域での取り組みをされましたか？




どのような方と取り組まれましたか？




➢ **地域で取り組んだ方の主な意見・感想**

● **実施した結果：**

- 民生児童委員の活動等について知ってもらえることができた。
- 地域の方と気になる人について情報を共有することができ、民生児童委員以外の方（サロン、ボランティア）の協力を得ることができた。

● **今後について：**

- 年に一度はこういう会を持ってもらい、災害時等の見守りなど地域でできるようにしていきたい。

● **気づき・思い：**

- 改めて町内の事を考えました。担当地区でも知らない人がいるので、区長さんに教えていただくなど、つながりは大切にしていかなければと思った。
- 地域住民の高齢化が進む中、更に連絡を密にしていく必要があると思う。
- 近所同士の行き来の多い方とそうではない方の差があり、個人のこと（課題）があまり共有されない現状がある。
- 住民同士がお互いを分かっている。
- 感想として、「皆が知っている」ということは心強く思った。

● **方法：**

- 今回、区長さんやサロンの方の意見を聞き、仕上げた。
- 地域で近所同士、目の届く範囲で連絡し合い、区長にも連絡している。回覧も手渡しにして安否確認している。その上で、もう一度マップで確認している。

**➢ 地域で取り組んでいない方の理由**

● アンケートの中で、地域で取り組まなかった理由として、**“地域で取り組みたいと思ってはいるが、進め方や方法が分からない”**を選択された方が最多であった。

その理由としては、

- 区長・班長に協力してもらえなかった。
- 必要性を分かってもらえるのには時間がかかり、毎年区の役員が交代するので難しい。
- マップ作成することについて、民生児童委員から地域でのマップづくりをすすめるのではなく、社協（CSW）が主導権を持ってすすめてほしい。
- 地域に、民生児童委員が見守り活動の資料としてこのようなマップを作成していることを認識してもらうことが必要。地域の認識不足がある。

などの理由であった。

● また、次いで多くあった理由は、**“地域で取り組む必要性を感じなかったため、民生児童委員のみで作成した”**であった。

その理由としては、

- 個人情報を守るため。
- 地域でのマップづくりは監視されている、していると誤解を招くこともある。
- 地域で情報を共有するマップづくりは民生児童委員の守秘義務の関係から難しい。
- 面倒な役から逃げる人が地域に多い。
- つながりの強い地域で近所同士が密である為、必要性を感じなかった。
- 地域でのマップづくりは、民生児童委員にプラスの可能性は充分にあるものの、行政や自治会の仕事であると思える面もある。

などの理由であった。

● **地域では取り組まなかったが、民生児童委員のみでマップづくりをされた方の意見・感想**

- マップに起こしてみると、自分の地域は改めて独身男性が多いことを再確認した。いつのまにか増えていた。マップに起こすのは良いと思った。
- 記憶の中にあるが、改めてマップ作成することにより一人一人のことを改めて見直しできる良い機会になった。

### e．活動の見せる化

## ＣＳＷの戦略！ 町内のお宝を“見せる化”する

第４回の町民向けセミナーの企画会議で話し合った際、「CSW として伝えたいことは、これまでの３回のセミナーで伝えられた」という結論に至りました。そこで、第４回目は、今までの集大成として、町内の活動にスポットを当て、知ってもらう企画にすることにしました。すなわち、町内の「素敵な活動」＝「お宝」を知ってもらい、町内に広めていく（お宝を増やしていく）ことを目的とした**「ご自慢大会」**の開催です。

**実践１**　**下市町内の小地域福祉活動を“見せる化”― 第４回　町民向けセミナー**

日　時：平成31年3月20日
参加者：約90名
テーマ：「わが地域、つながり、支え合い自慢　～人がつながり・まちを元気に～」
登壇者：３つの地域の小地域福祉活動者　各１名　計３名
　　ファシリテーター（下市町社会福祉協議会　CSW　野田 代始子）
　　コメンテーター　（奈良県社会福祉協議会　地域福祉課　武智 奈津子）
内　容：以下、３つの活動について活動者から活動内容や思い、課題などの話を聴く。
　　①新規サロン、②長年継続のサロン、③地域での“支え合いマップ”づくり
目　的：町内の小地域福祉活動の実践発表を通じて、その取り組みを学び合い、町内により一層元気な活動が広がること。
結　果：今回のセミナーを活動の発表の場としたことで、町内の活動の内容や思いを住民に**“見せる化”**できた。参加者からは、早速、「自治会やご近所単位でマップづくりに取り組んでいこう」という声があがった。発表者（活動者）にとっても自分たちが行ってきた活動を振り返る良い機会となった。

## 今後の方向性！

地域で行われている活動、すなわち**“お宝”**に目を向けた発表の場としたことで、取組みや活動者の気づき、思いを住民とともに知り、見つめ直す機会となりました。
地域の“お宝”に目を向け、既にある活動をよりよいものにしたり、新たな活動へとつないでいけたりするように今後もこのような発表の場などを設け、情報発信していきたいです。

大変参考になりました。男性の参加者を増やすのが私共の課題です。自主的な活動内容が参考になりました。手づくり、一人ひとりを活かした活動、とてもやりがいがあると思います。

助け合いマップのお話が大変良かったです。共有、思いを受け継ぐことの大切さを感じました。

こうして各地域の取り組みを聞かせていただくことがとても大切だと思います。この話をもとにグループで話し合う時間があったらもっと交流できたと思います。聞くだけに終わらないセミナーも考えてください。

今後の活動の参考になる「キーワード」を得ることが出来た。

## 第４回 しもいち支え合い活動セミナー
## 「わが地域、つながり　支え合い自慢」
## 参加者からの声を一部ご紹介

１人では知恵や知識や行動も小さいですが、多くの方に参加いただくことで活動内容も豊かに膨らみ、活発な活動につながると思います。

高齢化の進む各地域で力を合わせて安全で安心して元気に暮らせる工夫をされていること、すばらしと思いました。

マップづくりがいいなと思った。

それぞれの地域で皆さんよく見て、よく考えて活動していらっしゃることが分かって勉強になりました。

地域は高齢ばかりですが、出来る限り皆が生活出来るよう共に考え歩んで行きたいと思います。笑顔を忘れない地域にしたいです。

## 3 事例

### （1）個々の支援

個別ケース事例①

**住民と専門職の協働による見守り支援体制の構築**

**◆ Story**

93歳のＡさんは現在一人暮らし。昔から自宅で仕事をしていたため、地域との交流は多い方です。高齢になってからも、隣に住んでいる家主や近所の人が買い物支援や見守りをしてくれ、Ａさんは穏やかに生活していました。

平成27年の夏、民生児童委員より「Ａさんが猛暑の中、窓も開けず、エアコンもつけずに過ごしている。熱中症が心配です」と包括支援センターに相談がありました。包括支援センターからの連絡を受け、社会福祉協議会のケアマネジャーと民生児童委員がＡさん宅を訪問しました。

民生児童委員の話では、Ａさんは２年程前から「家主さんに追い出される。近所の人が出て行けと言った」など言うようになりました。また薬の管理が出来ておらず、民生児童委員が介入しています。

その後、Ａさんの同意を得てデイサービスの利用を開始し、しばらくは生活が安定していました。様子が変わったのは、平成28年12月。楽しみにしていたデイサービスを何かと理由をつけて休むようになり、次第に被害的な発言をして利用を拒否するようになりました。ケアマネジャーと薬剤師の訪問（週１回）のみ継続してデイサービス利用の説得を続けました。Ａさんの状況を民生児童委員から聞いたＣＳＷは、ケアマネジャーと情報共有しました。Ａさんは、入浴もせず、自宅内も食べ物が腐ったような異臭がしていましたが、誰にも冷蔵庫などを触らせない状態でした。家主夫婦や民生児童委員は根気よく訪問し、安否確認やおかずの差し入れを継続していました。

これまで地域住民や民生児童委員の見守りで何とかやってきましたが、平成29年秋ごろより、自宅周辺にもゴミをため込み異臭がするようになりました。また、本人の金銭管理能力も曖昧になってきていました。社協のケアマネジャーは、これからは地域住民、民生児童委員、ＣＳＷとの連携が必要だと考えＣＳＷ（地区担当）に相談しました。

ＣＳＷの呼びかけで、今年３月にＡさん宅で姪、家主、民生児童委員、ケアマネジャー、ＣＳＷのメンバーで会議を行いました。

姪がＡさんに話して了承を得て、近隣住民と家主、民生児童委員、ＣＳＷ、ケアマネジャー、訪問介護が協力して、自宅内と自宅周辺にため込まれたゴミの片づけを行いました。その際にＣＳＷから行政にも働きかけ、回収日ではないが、粗大ゴミの回収に来てもらえました。

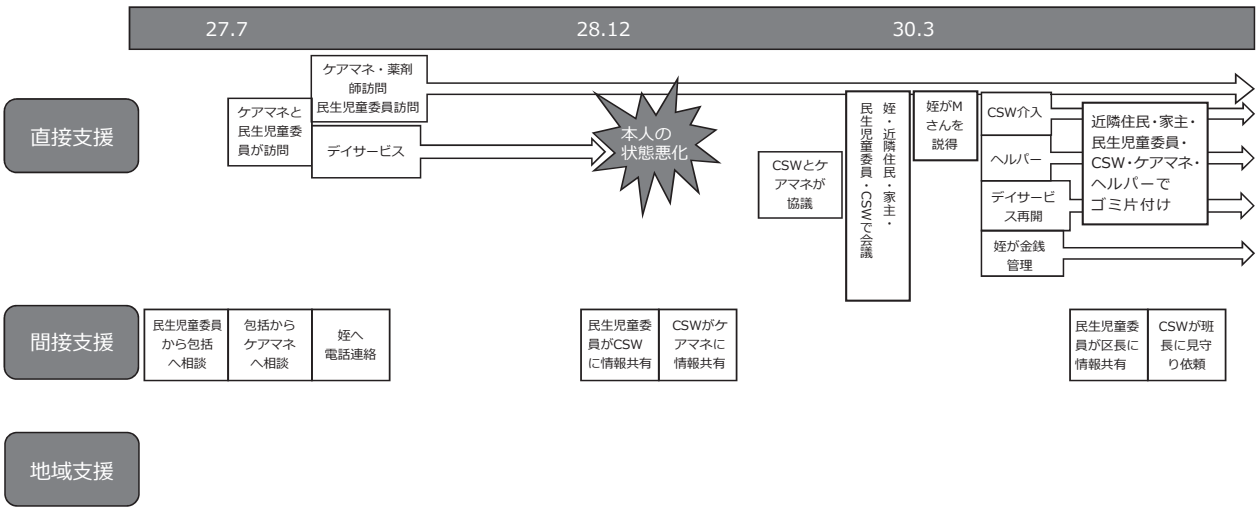
片付け後、Ａさんから「大事なものを捨てられた」と聞いた区長が民生児童委員に事情を尋ねてきました。民生児童委員は、Ａさんの状態を区長に説明しました。ＣＳＷからは、班長にＡさんの状態を話し、見守りをしてもらうように依頼しました。こうして、地域での見守りが強化されました。

一方、Ａさんはデイサービスの利用を再開、訪問介護の利用を開始。姪が金銭管理をしてくれることになりました。地域住民、民生児童委員、ＣＳＷ、ケアマネジャー、訪問介護の連携もスター

トしました。現在も介護サービス（ヘルパー、デイサービス、薬剤師の訪問）の利用と、地域での見守りやサポートが継続され、問題が起こるとCSWが相談窓口となって連絡を取り合いながら対応しています。

| Aさん | 地域 |
|---|---|
| 93歳。一人暮らし。地域との交流は多い。<br>2年前より記憶障害、被害妄想あり。服薬管理できていない。 | 隣人である家主や近隣住民がAさんの買い物支援や見守りをしている。服薬管理できていないため、民生児童委員が介入。 |

| | |
|---|---|
| 専門職の介入 | 平成27年夏、Aさんについて民生児童委員が包括支援センターへ相談。包括支援センターの連絡を受け、社協のケアマネジャーと民生児童委員が訪問。Aさんの同意を得て、デイサービス利用を開始。一旦生活安定。平成28年12月、Aさんが被害的な発言をしてデイサービスの利用を拒否。薬剤師とケアマネジャーの訪問は継続しつつ、デイサービスの利用を説得。 |
| CSWとケアマネの連携 | 民生児童委員からAさんの状況（入浴せず、自宅内に異臭あり）を聞いたCSWは、ケアマネジャーと情報共有。家主夫婦や民生児童委員が根気よく訪問し、安否確認していたが、平成29年秋頃より、状態悪化。ケアマネジャーは、地域住民、民生児童委員、CSWとの連携が必要と考え、CSWに相談。 |
| 関係者会議 | CSWが呼びかけ、Aさん宅で姪、家主、民生児童委員、ケアマネジャー、CSWで会議。 |
| 住民と専門職の協働 | 姪がAさんに話して了承を得て、近隣住民、家主、民生児童委員、CSW、ケアマネジャー、訪問介護（ヘルパー）が協力してゴミの片付け。 |
| 見守り支援体制の構築 | 民生児童委員より区長に、CSWより班長にAさんの状態を話し、見守りを依頼。Aさんは、デイサービス利用を再開。訪問介護利用を開始。姪が金銭管理。CSWを相談窓口とした地域住民、民生児童委員、ケアマネジャー、訪問介護（ヘルパー）との連携がスタート。 |



| | | |
|---|---|---|
| ＣＳＷが果たした役割 | 民生児童委員から聞いた情報をケアマネジャーに伝えた。 | • ケアマネジャーとの連携 |
| | 近隣住民やケアマネージャーと自宅を片付けた。 | • 地域住民と協働 |
| | ＣＳＷが姪、家主、民生児童委員、ケアマネジャーに呼びかけ、会議を開催した。 | • 当事者、地域住民、専門職の対話の場づくり |
| | 班長に働きかけた。 | • 見守りの輪を拡大→見守り強化 |
| | 相談窓口になった。 | • 相談先の明確化<br>• 連携の中核機能を担う |

| | |
|---|---|
| 成果 | 区長や班長にAさんの状況を知ってもらうことができた。 |
| | 多職種が連携することで、住民が安心してAさんを見守ることができるようになった。 |
| | 姪が関わってくれるようになり、当事者（本人、姪）、地域住民、専門職の連携ができた。 |

## CSWの気づき・思い

認知症が進行しても、地域住民に見守られながら生活できている背景には、この地域で見守りの体制が以前からあったことに加え、Ａさん自身の人柄や、元々の職業柄で昔からＡさん宅に地域住民の出入りが多かったことがあります。しかし、地域住民だけの支援にはいずれ限界が訪れます。このケースでは、地域での見守りが上手くいっている間に、専門職が連携することで、地域住民は安心して見守りを続けることができるようになりました。また、姪が金銭管理をしてくれることで住民の負担感も軽減しました。

個別ケース事例②

## 当事者を真ん中に、家族と地域のつながりづくり

ＣＳＷは民生児童委員から、80代後半、要介護１のＢさん夫婦について次のような相談を受けました。「Ｂさんが近くの空き地にゴミを捨てて、近くに住む区長がゴミの後始末をしてくれている。行政にお願いしてゴミの分別の説明をしてもらっても変化がみられない。また、Ｂさんはまだ車に乗っているが、車のあちこちに当てた様な傷があり、危ない。妻は以前から近隣住民との関りが全くなく、50代息子２人と同居で訪問もできず困っている」

相談を受けたＣＳＷは、Ｂさん夫婦の様子を伺うために区長宅を訪問しました。困った事はないか尋ねると、「最近出かけることも面倒だ」とＢさん。包括主催の「はつらつ教室」を勧めるも、夫婦共に「参加したくない」と返答。ＣＳＷは２人に地域のサロンやカラオケなど出かける様に勧めました。タクシー券について尋ねると、妻は利用しているが、夫はまだ車を運転しているので必要ないとのこと。高齢で運転も危険であるため、タクシー等の利用を促し、ＣＳＷが役場で代理申請をして渡すことになりました。Ｂさんも妻も認知を疑う様な言動がありました。ＣＳＷは区長へＢさん宅を訪問した際の様子を伝え、今後も見守りと変化があれば連絡いただく様にお願いしました。

約１カ月後、包括より「Ｂさんが車から出られなくなったり、ライトのつけ方が分からないと言ったりするなど、かなり危険な様子だ」と連絡を受け、ＣＳＷとケアマネジャーとでＢさん宅を訪問。近所の方が気にかけてくれることに対しては見張られていると感じている様子。病院へは本人の運転で行っているとのことでした。ＣＳＷは危険性が高いと感じ、同居の長男と連絡をとって、対応を考えることにしました。

ＣＳＷが長男に連絡すると、長男は区長からも父親の様子を伝えられ、「気にかけてほしい」と言われたと話しました。

また別の日、ＣＳＷが訪問した際、電気代の滞納があることが発覚しましたが、なんとか電気は止められずに済みました。同日、再びＣＳＷとケアマネジャーでＢさん宅を訪問。Ｂさんの希望でデイサービスの利用が決定しました。

ＣＳＷは、長男へＢさん夫婦の様子を伝えました。息子２人は、同居とはいえ両親と一緒に生活する時間が少なく、認知症について理解していない様子で、両親の変化にまったく気づいていませんでした。

その後、Ｂさんはデイサービスへ週２回通い始めました。

ある日、ＣＳＷが車庫で車に乗っているＢさんを発見。実際には動かせてない様子でしたが、声をかけ、危ないので運転しない様にと家に連れて帰りました。ＣＳＷは、息子２人と連絡をとり、危険な状態を伝えました。

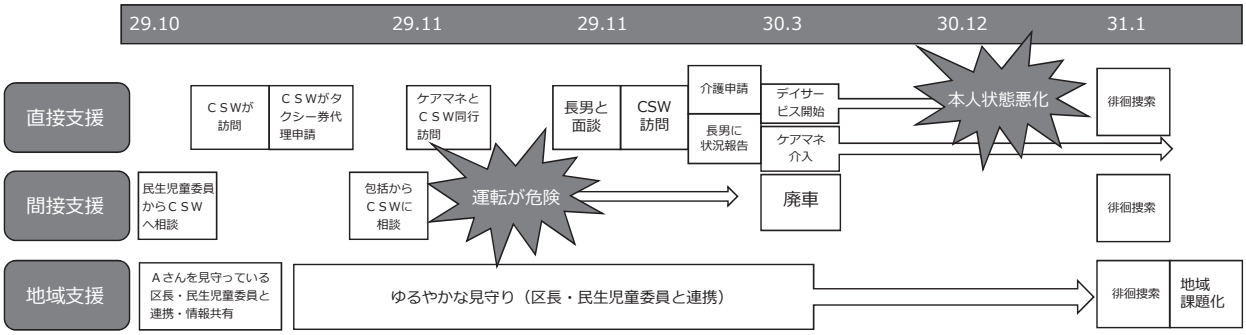
その後、車は廃車され、Ｂさんは継続してデイサービスにも通所しており、息子達も少しずつ両親の様子を気にかけている様で、デイサービスの準備や食事の用意もしています。普段の様子は少しずつ落ち着いてきている様に思われ、地域の区長や民生児童委員、ＣＳＷは連携して見守りを継

続していました。

Ｂさんは、デイサービスの通所日以外は閉じこもりの生活が続いていました。通い始めてから10ヶ月が経ったある日の朝、「パジャマのまま出かけて３時間経過しても帰宅しないと捜索願が出された」と行政より連絡が入りました。行政、社協、住民の捜索と同時に町内ケーブルテレビにて情報を流しました。その後、自宅近くの倉庫にいたのを発見され、近隣住民が送り届けてくれました。

後日、ＣＳＷに捜索に当たってくれた近隣住民から、町内会としても認知症の方への対応の仕方等を学習したいという思いが伝えられました。

| | Ｂさん | 地域 |
|---|---|---|
| | 80代後半のBさんは、要介護1。元老人会役員。80代後半の妻も要介護1。50代の未婚の息子2人と同居。近隣住民との関わりがあるのはBさんのみ。 | 区長や民生児童委員がＢさんを気にかけ見守っていた。 |
| 支援のきっかけ | 民生児童委員がCSWにBさんについて相談（空き地にゴミを捨てる、車の運転が心配）。「Bさんの妻は、以前から近隣住民との関わりが全くなく、息子2人が同居で訪問できずに困っている」とのこと。 | |
| 状況確認 | CSWがBさん宅を訪問。「最近、出かけることも面倒だ」とBさん。夫婦に地域のサロン等への参加を勧め、タクシー等での移動を促した。夫婦ともに言動に認知症の疑いあり。 | |
| 地域・当事者（家族）・専門職のつなぎ | CSWは区長に訪問時のBさん夫婦の様子を伝え、今後も継続した見守りを依頼。<br>約1ヶ月後、包括支援センターよりBさんの状態悪化の報告を受け、CSWとケアマネジャーで訪問。CSWが長男と面談。長男は、区長からもBさんの様子を伝えられ、「気にかけてほしい」と言われたとのこと。CSWが訪問した際、電気代の滞納が発覚。同日、CSWとケアマネジャーで訪問。Bさんの希望でデイサービス利用が決定。息子2人に報告。息子たちは両親の状態を把握できていない様子。Bさんがデイサービス利用を開始。ある日、CSWが車庫で車に乗っているBさんを発見（実際には動かせていない）。息子2人と面談。 | |
| 住民による地域課題化をキャッチ | 車は廃車され、Bさんの様子は安定。息子たちも両親を気にかけ、支援。区長と民生児童委員、CSWが連携して見守りを継続。ある日、Bさんが行方不明になり、行政、社協、住民の捜索の末、発見。CSWは、近隣住民の「町内会としても認知症の方への対応の仕方等を学習したい」という思いを聞いた。 | |



| | | |
|---|---|---|
| CSWが果たした役割 | CSWが民生児童委員や区長とBさん世帯の間に入り、不安を軽減しつつBさんとのつながりをつくった。 | • 気にかけている人と当事者のつなぎ<br>• 気にかけている人の不安を軽減 |
| | 息子２人に民生児童委員等の関係者の見守りを含めて両親の状況を認識してもらうとともに、寄り添い支援を行った。 | • 家族との情報共有<br>• 家族の心情に寄り添い、不安軽減<br>• 気にかけている人と当事者のつなぎ |
| | Bさん夫婦に継続して関わり、変化を捉え、家族や関係機関につないだ。 | • Bさん世帯の状況把握<br>• Bさん夫婦への伴走支援 |

| | |
|---|---|
| 成果 | Bさん世帯を見守る体制（区長、民生児童委員、CSW）が構築された。 |
| | Bさんが福祉サービスにつながった。 |
| | 今までは父親だけが地域住民との関わりがあったが、地域住民と息子との関係性も築けた。 |
| | CSWが地域住民の力（地域力）に気づくことができた。 |
| | 地域住民がBさんへの対応を通して、認知症の方への対応を地域課題として捉えた。 |

## CSWの気づき・思い

Ｂさん夫婦の同居家族である息子２人は、日中は家にいません。そのため、Ｂさん中心で日常生活や近所づきあいが行われていました。ＣＳＷは、父親の認知機能の低下と共に、Ｂさん夫婦の状況が変わったことを近隣住民からの相談で認識することとなりました。担当民生児童委員もＢさんのことは気になっていましたが、息子２人が同居しているため、訪問できていませんでした。

ＣＳＷの活動が周知されるとともに、「気になっているが、どうしていいかわからない」という相談が増え、ＣＳＷと区長の関係性も徐々にできてきていました。そうした中で今回のケースが発覚したのです。

ゴミの始末ができていない、空き地にゴミを捨てる等認知症を疑う行動として把握ができたのも区長や近隣住民の見守りによりわかってきたことでした。

問題（徘徊）行動があった時も、住民の協力で早急に発見できました。今後は、認知症についての学習や話合いの場を住民とともに進めていきたいです。

個別ケース事例③

## 当事者の思いを代弁！地域住民によるソーシャルアクション

### ◆ Story

Ｃ地区は、町を南北に流れる川沿いにある30軒59名の小規模で細長い集落です。ほとんどの家の前が坂や階段になっています。

ある日、ＣＳＷは、Ｃ地区のサロン代表者（元民生児童委員、区長の妻）から地域の独居世帯や問題を抱えた高齢者世帯の話を聞きました。特に心配していたのは、ゴミ出しの問題を抱えている80代後半のＤさん夫婦のことです。Ｄさんから相談を受けた区長が行政に相談に行きましたが、「収集車が入れない所は、個別に収集は行っていない。地域の助け合いでお願いしている」という返答だったとのことです。

翌日、ＣＳＷはＤさん宅を訪問しました。Ｄさんは、若い頃に自営業（割り箸づくり）を営みながら、地域の消防団に入って地域を守っていた経験があり、「今、自分が高齢になり、生活に支障も出てきた。下市町は高齢の町で、自分たちのように出来ないことが増えてきている高齢者がいると思う。地域でそういう人達を把握して、行政に報告することも必要だ」と思いを語ってくれました。

同日、ＣＳＷは行政に「ゴミを坂の途中まで出すので、収集日に取りに来て欲しい。毎回近所の人にお願いするのは申し訳ない」というＤさんの思いを伝えました。しかし、「ステーションまで出してもらうのが基本。個別には収集していない」との返答でした。

ＣＳＷはゴミステーション近くの住民Ｅさんに協力をお願いしました。Ｅさんは今までも、見かけた時はＤさんの妻のゴミ出しを手伝ってくれており、快く承諾してくれました。

ＣＳＷはＤさんに行政の返答とゴミの日に坂の途中まで出せば下の住民Ｅさんが協力してくれることを伝えました。ＣＳＷは区長にも報告しました。区長は、今回のケースの他にも同様の状況でゴミ出しの問題を抱えた世帯を把握されており、地域の課題と捉えていました。ＣＳＷは区長に自治会での話し合いを提案しました。

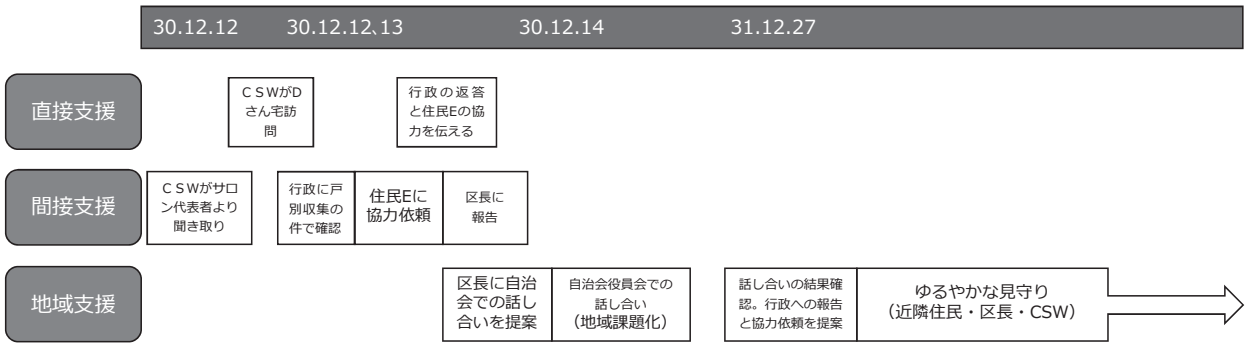
翌日、区長が社協に来所され、「役員会でＤさんのゴミの件を相談しようと思う。近隣で何か生活支援サポートの事例はないか」と尋ねられました。

後日、ＣＳＷが区長に話し合いの結果を尋ねると、「特にこれと言って解決できる案はなかった。今回のＤさんの件は、近くの住民Ｅさんにお願いした」との返答でした。ＣＳＷは、話し合いの機会を持ってくれたこと、近隣住民で助け合い、地域のことを地域住民全体で考えてくれていることに感謝の意を伝えました。また、行政に地域での対応を伝え、近くの住民が不在の場合等ゴミ出しの支援ができないときのために、柔軟な対応をお願いしておいてはどうかと提案しました。

数日後、区長より「行政に地域での対応を伝えたところ、坂の途中まで出してくれたら、職員が収集に来てくれることになった」と連絡がありました。ＣＳＷは、今後もＤさんの見守りをお願いしました。

| Dさん夫婦 | 地域 |
|---|---|
| ８０代後半の夫婦。夫婦ともに介護認定はなし。家屋の前が坂道。 | 町を南北に流れる川沿いの細長い集落。３０軒５９名の小さな地区。家屋前に坂や階段が多い。 |

| | |
|---|---|
| 支援のきっかけ | CSWは、地域サロン代表者からゴミ出しの課題を抱えたDさん夫婦の話を聞いた。相談を受けた区長が行政に相談したが、「収集車が入れないところは、個別に収集は行っていない。地域の助け合いでお願いしている」という返答だったとのこと。 |
| 当事者の思いを代弁 | CSWがDさん宅を訪問し、ゴミ出しの困難さを聞いた。元消防団のDさんは、「自分達のような高齢者を把握して、行政に報告することも必要だ」と思いを語った。CSWは行政に「ゴミを坂の途中まで出すので、収集日に取りに来て欲しい。毎回近所の人にお願いするのは申し訳ない」というDさんの思いを伝えたが、「個別には収集はしていない」との返答。 |
| 住民に協力依頼 | CSWよりゴミステーション近くの住民Eさんに協力を依頼し、承諾を得る。Dさんに報告。 |
| 地域での話し合いを提案 | CSWより区長へ報告。区長がゴミ出し問題を地域課題と捉えていると知り、自治会での話し合いを提案。その後、自治会でゴミ問題について話し合いが行われた。 |
| 行政アプローチを提案 | CSWより区長に話し合いの結果を確認。行政に地域での対応を伝え、近くの住民が不在の場合等非常時に備えて柔軟な対応をお願いしてはどうかと提案。後日、「行政に地域での対応を伝えた」と区長より報告あり。Dさん世帯やEさん世帯のゴミを坂の途中まで出せば、行政が収集してくれることになった。 |



| | | |
|---|---|---|
| CSWが果たした役割 | Dさん（当事者）の思いに寄り添った。 | • 寄り添い支援 |
| | Dさん（当事者）の思いを行政に伝えた。 | • 当事者の思いを代弁 |
| | 区長がゴミ問題を地域課題と捉えていることを知り、自治会で話し合うことを提案した。 | • 地域での話し合いを提案 |
| | 住民Eさんに協力を依頼した。 | • Dさんの暮らしを間接的に支援 |
| | 地域住民で対応できない時のため、行政に柔軟な対応をお願いするよう区長に提案した。 | • 住民のソーシャルアクションを支援 |

| | |
|---|---|
| 成果 | Dさん世帯のゴミ出し問題をきっかけに、地域課題として自治会で話し合うことができた。 |
| | ゴミ問題をきっかけに近隣住民が日常を気にかけ合う関係性を確認し、その関係をCSWが間に入って改めてつなぐことで見守り体制を構築した。 |
| | 区長よりゴミ出しが困難な高齢者がいることや地域での対応を伝えた結果、行政の高齢者世帯への柔軟な対応につながった。 |

## CSWの気づき・思い

この地域は、10年前からサロン代表者が民生児童委員の時に、地域のボランティアと共にサロンを立ち上げ、高齢者の憩いの場、相談できる場となっています。
地域の中で、課題が出てきたときにみんなの問題として捉え、話合う場が大切だと改めて思いました。また、地域だけで解決できない時は次につなげる場があると地域の人も安心できるのではないかと感じました。そのような場を誰がどのようにつなげてコーディネートしていくのかをCSWとして話し合っていきたいです。

## （2）つながりの場づくりー新規立ちあげサロン

大峯サロン

### 一人ひとりの思いからみんなの思いへ<br>復活したみんなの“いい場所”

◆ **地域概要**

| | |
|---|---|
| **基礎情報** | 大峯町61軒（男性64名・女性66名）計130名、高齢化率45％<br>• 下市町のほぼ中央に位置し、309号線沿いに民家が集中し、山手（峯山）の町道に続く坂道沿いにまばらに民家がある。<br>• 昔は商店街として賑わっていた。<br>• 平成16年４月より高齢者ふれあいいきいきサロン（婦人会中心）を町内でいち早く立ち上げ、物つくりやゲーム、食事会など年間10回の活動を行っていた。役員が変わり、平成24年３月を最後に後継者の問題からサロンは休止。 |
| **課題** | • 坂を下りて集会所に出向くのが困難な高齢者も多い。 |
| **強み** | • 老人会、子ども会、婦人会、自治会のつながりは強い方。<br>• 夏休みは、みんなで一緒にラジオ体操。<br>• ８月の地蔵祭りは全戸が参加協力。<br>• 特に老人会（生楽会）の活動が活発。 |

◆ **Story**

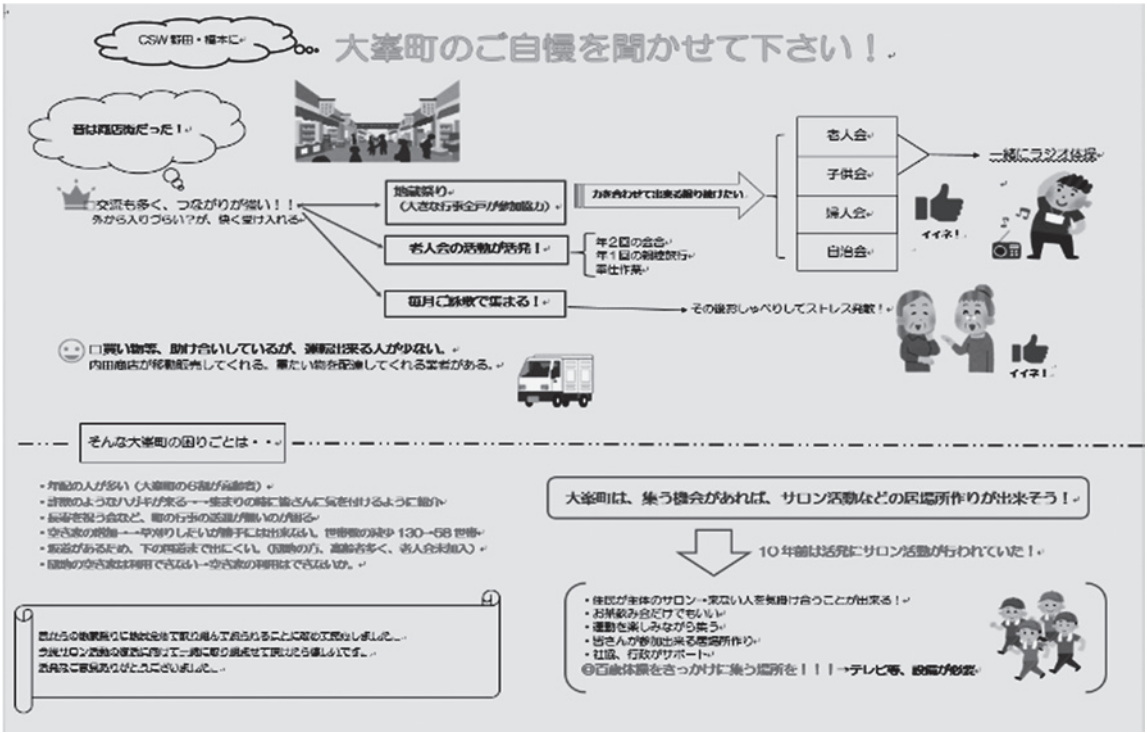
この地区では、婦人会が毎月ご詠歌で集まり、その後茶話会を行っていました。しかし、以前あった高齢者ふれあいいきいきサロンは役員の交代とともになくなっており、地域の高齢者からは、「以前のように地域でサロンをしてほしい」との声がCSWに届けられていました。

CSWがCSW事業の説明のため地域に出向いた際、区の役員、老人会、婦人会の方たちと座談会を行いました。“地域の良いところ”を聞いていくうちに、「婦人会以外の人も参加できる場が欲しい」「もう一度サロンを復活させたい」との思いが婦人会の方たちを中心にあがってきました。

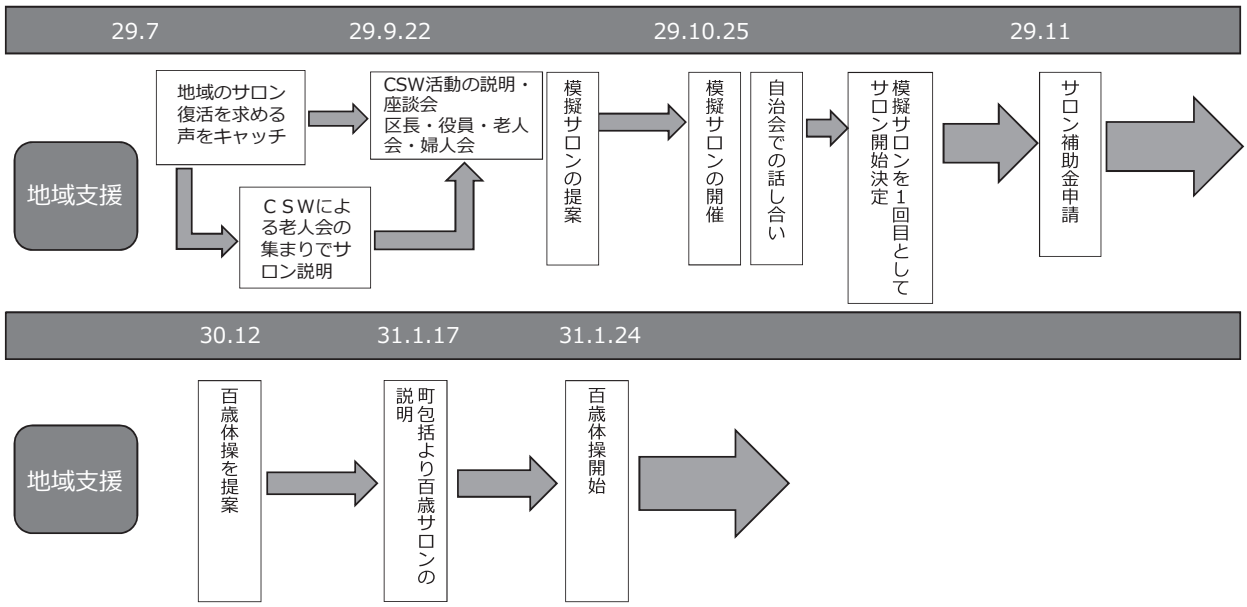
CSWは、この機会をサロン復活のチャンスと捉え、区長や老人会に「試しに一度やってみてはどうか」と働きかけました。その後、老人会が区の役員の賛同と協力を得て、模擬サロンを実施。「これならできそうだ」とサロンを本格的に始めることになりました。

平成29年９月、老人会メンバーが担い手となり、サロン活動が本格的に復活。月１回開催されるサロンには、女性だけでなく、男性も参加しています。

サロン復活後も、CSWは関わりを継続しました。老人会に百歳体操の実施を提案したところ、以前より高齢化に伴う虚弱や閉じこもりの多さを感じており、「百歳体操をしてみたい」という話が出てきました。テレビとビデオを購入し、包括（役場）からの説明を経て、現在は毎週木曜日に開催されています。月１回のお茶のみサロンと週１回の百歳体操、多様な居場所が地域にでき、住民は楽しんで参加しています。




| | |
|---|---|
| 地域からの声 | 婦人会では、毎月ご詠歌で集まり、その後茶話会が行われていた。一方、地域の高齢者からは、「以前のように地域でサロンをしてほしい」との声がCSWに届けられていた。 |
| ↓ | |
| 地域で話し合う場づくり | CSWは、地域でCSW事業の説明と座談会を開催。区の役員、老人会、婦人会の方たちが参加。“地域の良いところ”を聞く内、「もう一度サロンを復活させたい」との思いが婦人会を中心にあがった。 |
| ↓ | |
| 模擬サロンの提案 | CSWが区長や老人会に「試しに一度やってみてはどうか」と働きかけた。その後、老人会が区の役員の賛同と協力を得て、模擬サロンを実施。 |
| ↓ | |
| 結　果 | 平成２９年９月、老人会メンバーが担い手となり、サロン活動が復活。 |
| ↓ | |
| 新たな居場所の提案 | サロン復活後も、CSWは関わりを継続。老人会に百歳体操の実施を提案すると、「やってみたい」と実施が決定。現在は、月１回のお茶のみサロンと週１回の百歳体操が行われている。 |




| | | |
|---|---|---|
| ＣＳＷが果たした役割 | 住民の声を拾い、座談会を行うことで地域住民の思い（サロンを復活させたい）を共有するきっかけをつくった。 | • ニーズキャッチ<br>• 地域で話し合う場づくり |
| | 住民の「サロン復活」に向けた思いが共有された機会を逃さず、区長や老人会に働きかけた。 | • 住民の変化をキャッチ<br>• 模擬サロンの提案 |
| | サロン復活後も継続して関わり、新たな居場所として百歳体操を提案した。 | • 伴走支援<br>• 多様な居場所の提案 |

| | |
|---|---|
| 成果 | 地域の思い（サロンを復活させたい）が座談会で共有された。 |
| | 模擬サロンをしたことで具体的にサロン復活に向けたイメージができ、実現に向け動きだした。 |
| | 月１回のお茶のみサロンと週１回の百歳体操という多様な居場所ができた。 |

## CSWの気づき・思い

この地域はもともとつながりが強く、祭り事も全戸で取り組んでいます。高齢者ふれあいいきいきサロンにもいち早く取り組んでいましたが、休止状態でした。
サロンを切望する高齢者がいる中、主になる後継者がいないという現状はどこのサロンでも起こりうる課題です。今回のように、“地域づくり”という観点からＣＳＷが関わることにより、区の役員たちにサロンの必要性を説明していきたいと思います。
この地域には、坂道により集会所まで出て来られず、サロンに参加できない人がいるという課題もあります。また、サロンが高齢者だけでなく、若い世代の人を交えた活動につながればと思います。今後も継続して関わり、住民とともに悩みながら進めていきたいです。

原谷サロン

# サロン立ち上げの意欲的な取り組み ～点在する集落の声～”

## ◆ 地域概要

| | |
|---|---|
| 基礎情報 | 原谷地区　　人口83人　39世帯　高齢化率約51％<br>• 下市町の中央に位置し、山間部で坂道が多く家が点在している集落。<br>• 祭り事は全戸が協力的であるのが強みである。<br>• 柿農家が多いが後継者不足が課題である。<br>• 坂道が多く、高齢者が集う場所、機会が少ない。 |

## ◆ Story

H29年の秋、CSWがこの地区の区長、区役員、民生児童委員にCSW事業の説明に行った際、“つながりづくり”の大切さを伝え、サロンのもたらす効果や必要性についても説明した。その際、「とても良い話を聞かせてもらった。地域の住民にも一緒に聞いてもらいたい」との意見が出ました。CSWは、改めて地域に説明に来ることを約束しました。

２ヶ月後、「～あなたの『得意』が『役割』の場所」と題し、町域で地域住民向けセミナー（社協主催）を開催。Ｂ地区の区長、区役員、民生児童委員にもサロンの重要性や意義を改めて考えてもらう機会になりました。

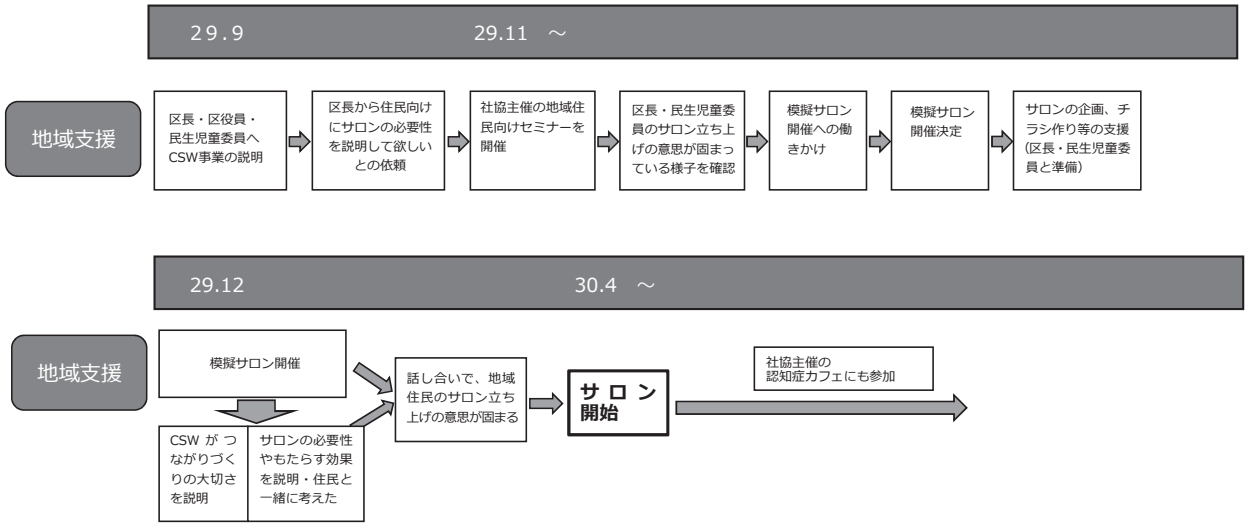
数日後、区長と民生児童委員からサロンの形態、費用面や立ち上げプロセスなど具体的なことが知りたいとのことで、CSWは、社協から立ち上げ支援金や、立ち上げのプロセスの中でも継続して支援していくことを話しました。

区長と民生児童委員のサロンを立ち上げる意思が固まっている様子を見て、CSWは「まず模擬サロンを一度やってみませんか。社協も支援します」と提案しました。模擬サロンは約１ヶ月後に開催することになり、CSWは、チラシ作りなどの支援をしながら区長や民生児童委員と準備を進めていきました。

模擬サロン当日、27名の地域住民が参加し、ゲームやお茶会など交流を楽しみました。模擬サロン終了後、CSWは参加者に向けてつながりづくりの大切さを話し、サロンのもたらす効果や必要性を参加者と一緒に考えました。参加者からは「サロンを開催すると見守り活動・支え合い・交流・つながり・安否確認ができる」という意見が出て、「サロンを立ち上げよう」という意見で一致しました。

翌年の春、サロンが正式に立ち上がりました。地域でサロンをしない月は、社協主催の認知症カフェに民生児童委員が住民を送迎して参加しています。毎月開催しない代わりに別の集う場に合流することで主催者側の負担を軽減し、無理ない範囲でつながりづくりの場を継続しています。

| | |
|---|---|
| 地域へのアプローチ | CSWが地域でCSW事業等を説明。区長、区役員、民生児童委員が参加。区長から地域の住民にも説明して欲しいとの要望が出た。 |
| サロンの意義を意識化 | 町域の住民向けセミナーに区長、区役員、民生児童委員が参加。サロン活動を通して、人とつながり、お互いに気にかける見守り、支え合いにつながっていく意義を改めて考えてもらう機会になった。 |
| 模擬サロンを提案 | 区長と民生児童委員がサロンについて具体的にCSWに質問。区長と民生児童委員のサロンを立ち上げる意思が固まっている様子を見たCSWは、模擬サロンの開催を提案。継続して支援する姿勢も見せた。模擬サロン当日は、27名が参加。 |
| 地域で話し合う場づくり | 模擬サロン終了後、CSW事業の説明とサロンの効果や必要性を参加者と一緒に考えた結果、サロン開催が決定。 |
| 結　果 | 翌年の春、サロン開始。無理ない範囲でつながりづくりの場を継続。 |



| | | |
|---|---|---|
| CSWが果たした役割 | つながりづくりの大切さやサロンのもたらす効果・必要性を地域住民に説明。 | • 地域づくりの啓発 |
| | 区長や民生児童委員のサロンを立ち上げる意思が固いことを見逃さず、模擬サロンを提案。 | • 住民の変化をキャッチ<br>• 模擬サロンの提案 |
| | 模擬サロン開催の提案と社協が支援するという宣言。 | • 安心して一歩が踏み出せる条件づくり |
| | サロンの立ち上げから継続的に関わった。 | • 伴走支援 |
| | 模擬サロン実施後、サロンのもたらす効果や必要性を参加者と一緒に考えた。 | • 地域で考える場づくり |

| | |
|---|---|
| 成果 | サロンのもたらす効果や必要性を地域住民で共有できた。 |
| | サロンの意義を理解した上で、地域住民の意志でサロン立ち上げにつながった。 |
| | サロンが立ち上げられたことで、地域住民の集う場ができた。 |

## CSWの気づき・思い

この地域は、山間部で坂道が多く家が点在しているため、高齢者が集う機会や集う場が少ない等の声がありました。もともと地域のつながりが強く、CSWが関わることで、区長や民生児童委員、地域住民の意思でサロン立ち上げにつながりました。
今後、継続的に関わり、軌道にのってきたら、顔を出すタイミングも考えながら、最終的には住民主体の自主運営を促しつつ、困った時にはいつでも相談して下さいという姿勢で関わっていきたいです。又、サロン活動を通して人とつながり、お互いに気にかける見守り、支え合いにつながっていけばと思っています。

## （3）見守りの活動づくりー支え合いマップを通した見守り

栃原マップづくり

# 活動者の気づきを活かした、地域で見守り合う仕組みづくり

### ◆ 地域概要

| | |
|---|---|
| 基礎情報 | 人口231人　　94世帯　高齢化率39.83%　（H30.12.31現在）<br>• 山間地域で東西に広く家が点在している地域。<br>• 東西にそれぞれ総代がいるが、民生児童委員は一人のみ。<br>• 栃原地区では民生児童委員による見守り活動や、平成16年からサロン活動を展開しており、段々と区の協力も得られるようになってきた。 |

### ◆ 地域でのマップづくりのきっかけ

地域でのマップづくりに取り組んだ民生児童委員は、日頃から一人での見守りや災害時の安否確認に“不安”を抱えていた。長野県白馬村堀之内地区の地震時に死者が出なかった取組み（安否情報を伝える仕組み、日頃からの親密な近所交際）を知り、自分の地域でも取り組めないかと考えた。また、社協が主催する町民向けセミナーで気になる人を地域で共有することの大切さを学んだ。そんな中、民生児童委員協議会でのマップづくりの改訂を機に社協から「地域でのマップづくり」の提案があった。“地域住民はそれぞれ気になる人の情報を持っている”と思った民生児童委員はこれを機にサロンの場で一度マップづくりに取り組むこととした。

### ◆ 地域でのマップづくり概要

- 形式…サロン活動の場でマップづくりを実施。
- 主な参加者…区の役員、サロン参加者、サロン活動者、民生児童委員、CSW
- 内容…民生児童委員のマップ（住宅地図）を活用し、気になる人について話し合い、気になる人にシールを貼る。災害時の安否確認についても話し合う。
- マップづくりで話し合った内容…
  - 参加者それぞれが気になっている人について
  - 長野県白馬村堀之内地区の災害時に死者が出なかった取組みを基に、自分たちの地域の平時からの見守りや災害時の安否確認について
- マップづくりで出た意見…

「災害時にも隣近所で支え合っていけないか。」
「普段から隣近所で見守りを行っていけば良いのでは。」
「マップをつくったら終わりではいけない。」　　など

### ◆ 結果（地域でのマップづくりからの展開）

マップづくりで出た「マップをつくったら終わりではいけない」などの意見から、区で平時からの見守り体制も含めた防災の要綱も必要だという結論に至った。その後、区の役員変更後に再度話し合いの機会を持ち、防災要綱の作成に至った。その中に、自治会長を頂点とし、区の役員・民生児童委員も含めたピラミッド型の組織図が盛り込まれ、平時の見守りや災害時の安否情報を伝える仕組みとして整備された。今後、調査票を用いて見守り支え合い要援護者カードを作成。マップとともに自治会役員、民生児童委員、消防団と情報共有していく予定となっている。

| | |
|---|---|
| マップづくりのきっかけ | ・民生児童委員一人での見守りや安否確認への不安。<br>・長野県白馬村堀之内地区の取組みを知る。<br>・気になる人を地域で共有する事の大切さを学ぶ。（社協の町民向けセミナー）<br>・地域でのマップづくりの提案（民生児童委員協議会マップ改訂時）。 |
| ↓ | |
| 地域でマップづくり | サロンの場でマップづくり（区の役員、サロン参加者、サロン活動者、民生児童委員、CSW）。見守りや災害時の安否確認について話し合った際、「マップを作って終わりではいけない」等の意見が出た。 |
| ↓ | |
| 話し合い | 区で平時からの見守り体制も含めた災害時の要綱の整備を必要性を感じ、区の役員変更後に改めて話し合った。 |
| ↓ | |
| 防災要綱整備 | 防災要綱を作成し、平時の見守りや災害時の安否情報を伝える仕組みを整備。 |
| ↓ | |
| 今　後 | 調査を行い、見守り支え合い要援護者カードを作成。マップとともに自治会役員、民生児童委員、消防団と情報共有する予定。 |

# Ⅲ.「夢語り」から始める地域づくり
## （奈良県社会福祉協議会）

## 1 下市町モデルの２年間をふり返って（成果と導入に向けた要点）

**◆ 社協内で「夢」を語り合い、実現に向けてプロセスを考える― Plan（計画）**

下市町社協は、「住み慣れた地域で誰もがその人らしく安心して暮らせる様に、住民が互いに認め合い”支え合う地域”をともに目指す」という**「夢」**を最終的な**目標（タスクゴール）**として設定。夢の実現に向けて**プロセス（戦略）**を考え、**段階的**に地域づくりを進めてきた。

①「夢」を語り合い、目標を明確化したことで職員間の共通認識が生まれ、地域住民への**メッセージの明確化**へとつながった。

② 国庫補助事業「地域力強化推進事業（委託事業）」「生活支援コーディネーター業務」の最終目標がCSW活動と同様である点に着目。関連するポイントを整理して取り組んだ。**他の事業と一体的に取り組む戦略**は、財源面、実践面で効果的だった。

③ 従来から実施する介護保険事業を「高齢者ニーズの把握がしやすい」**強み**と捉えた。把握した「制度の狭間の利用者のニーズ」を**反映**する視点を持ち、麻雀サークルや出張型認知症カフェといった新たな資源づくりにつながった。

**◆ 社協の「夢」を語り、住民の「夢」を引き出す― Do（実行）**

CSWは、町域全体へのアプローチと各地域へのアプローチを並行して行い、様々な方法で**社協の「夢」**を語ってきた。社協の「夢語り」は、**住民が自分たちの「夢」を考えるきっかけ**となった。住民懇談会等の**話し合いの場**では、それぞれの「夢」が**共有**され、地域の「夢」がカタチになっていった。その過程で徐々に住民の**“主体性”**も育まれ、活動の見直しや新たな活動の誕生という実践につながっていった。

CSWは、この**一連の流れを見守り、住民の変化を見逃さず、チャンスと捉えて**アプローチをした。また、住民と話し合った内容やCSWの“気づき”を住民に**フィードバック**することも忘れなかった。こうしたCSWの丁寧な関わりにより、下市町で“つながりの場（居場所）づくり”が95%達成したと言える。

**◆ 住民と一緒に「“地域の宝（強み）”探し（＝地域アセスメント）」― Do（実行）**

住民と話し合う中で、地域にはたくさんの**「お宝（キーパーソン、住民の気づき、住民の活動）」**があると気づいたCSWは、座談会を開いて**住民と一緒に「宝探し」**をした。地域の課題ではなく、**良いところ**に着目することで話は盛り上がった。また、住民は地域の「お宝」を見つめ直すプロセスを通じて、活動の意義を再認識していった。

この経験をふまえて、町民向けセミナーでは地域の既存の資源を「お宝」として**活動を見せ合う場づくり**も行った。実践発表を聴いて得た**“気づき”**を参加者が地域に持ち帰ることで、新たな実践の創出が期待される。

**◆ プロセスをみんなで考える― Do（実行）**

**「夢」**に向かってどう歩んでいくか。そのプロセスもCSWは、住民と一緒に話し合い、支援してきた。また、CSWはキャッチした個別のニーズや困り事も単独で対応せず、関係者（地域住民（当事者含む）、専門職）をつなげ、情報共有、検討する場をつくり、中核となって**協働**を生みだす役割を担ってきた。

協働は**多様性**につながり、関係者に**“気づき”**を生み、それを対話により共有する。それを繰り返す中で関係者の思いがカタチになり、理想の地域に一歩近づくのである。

こうした役割を担うためには、まず入口でニーズや困り事をキャッチしやすいようCSWが**身近な相談窓口**として広く門戸を開き、専門職や地域住民からの相談を受けることも必要であることを重ねて申し添えたい。

**◆ “ふり返り”の機会を持つ― Check（評価）、Action（改善）**

下市町社協では、定期的にCSW全員で**ふり返り**の機会を持ち、全体のどの地点にいるのか**確認**して戦略を練り直した。ふり返りは、日常的に一人で行うことも大切だが、複数人で行う機会もあると**多角的な視点**から意見が得られ、より効果的である。**共通認識**を持つことができるというメリットもある。

また、住民と一緒に夢に向かって進むプロセスの中でもふり返りの機会を持ち、改めて地域の“思い”を固めることもしてきた。場面により、住民とCSW、専門職とCSW、CSWとSVなど様々なパターンで行うと、それぞれの実践の次のステップに進む際に役立つだろう。

高齢化率約45％の下市町でのモデル事業だからこそ得た学びがある。高齢化が進む中、足りないモノばかりに目を向けて将来を悲観するのではなく、今ある**“お宝（強み）”**を探し、見つめ直し、磨き、**プラス思考**で将来に備えることの大切さである。

また、下市町では**住民と一緒に**「夢」を語り、「宝探し」をして、2年間をかけてじっくりと**“土台づくり”**を行ってきた。「住民と一緒に」することを徹底したのは、**“気づき”**を得てもらえ、**意識化やエンパワメント**につながるからだ。CSWだけで、大きな一歩を踏み出す必要はない。まずは、**「夢」**を語り合うところから始め、**住民と一緒に**一歩一歩「夢」に向かって歩いていってもよいのではないか。

## 2 県内におけるCSW普及に向けて

平成28年度から開始したCSWモデル事業により、3年を経て香芝市による市部モデルと下市町による中山間モデルを構築できた。2つの実践の中には、普遍的に参考にしていただけるポイントが数多くある。そのポイントをまとめた報告書から、**“良いとこ取り”**をして実践に取り入れていただければ幸いである。今後、県内各地で**それぞれの地域に合った**多様な実践が広がっていくよう、県社協としても現場主義で支援していきたい。

本書の作成にあたり、下市町社協のＣＳＷの皆様には内容のふり返りや原稿の作成等で多大なご協力をいただいた。末筆ながら、２年間のモデル事業へのご尽力と併せて、改めて御礼申しあげたい。

発行日　平成 31 年 3 月発行
発　行　社会福祉法人 奈良県社会福祉協議会
〒 634-0061　奈良県橿原市大久保町 320 – 11
TEL　０７４４－２９－０１００
URL　http://www.nara-shakyo.jp/